

鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (23)

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

1982年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

大隅地区の埋蔵文化財包蔵地の分布調査は昭和50年度から実施しており、第7年次である昭和56年度は、1市3町の分布調査と鹿屋市に建設される国立鹿屋体育大学用地内の確認調査を行いました。

本報告書はその調査概報であります。 「新大隅開発計画」が推進されつつある本地域の今後の文化財保護のため活用していただければ幸いです。

発刊に当たり、調査に御協力いただきました関係市町教育委員会並びに関係者各位に対し深く感謝の意を表します。

昭和57年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 井之口 恒 雄

例 言

1. 本書は、昭和56年度に実施した大隅地区埋蔵文化財分布調査の概報である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
3. 遺跡・遺物の実測図・写真等は、長野真一、峯崎幸清が分担し、土器の拓本は柳井谷加代子、玉利裕子、中塩屋育子の協力を得た。
4. 本書での市町別の遺跡に用いた数字は任意のものである。
5. 本書の遺物番号は、全て通し番号とし、遺物番号と本文中の番号は同一である。
6. 本書の執筆および編集は、長野、峯崎が行った。

本文目次

序文	1
例言	2
第1章 調査の経過	6
第2章 各市町の遺跡・遺物	7
第1節 輝北町の遺跡・遺物	7
第2節 田代町の遺跡・遺物	15
第3節 内之浦町の遺跡・遺物	19
第4節 鹿屋市の遺跡・遺物	22
第5節 国立鹿屋体育大の確認調査	34
第6節 大根占町・根占町・佐多町の遺跡・遺物	37
第3章 あとがき	52

挿 図 目 次

第1図	麓遺跡出土の有肩石斧	8
第2図	引地・徳光ヶ丘遺跡	9
第3図	徳光ヶ丘遺跡出土の石器	10
第4図	隠畑・久木野々・ハシバダン・青木段遺跡出土遺物	12
第5図	観音ヶ尾遺跡出土遺物	13
第6図	大根田遺跡出土の弥生式土器および石斧	17
第7図	大根田遺跡出土の弥生式土器および近世の遺物	18
第8図	辺塚・本地遺跡出土遺物	20
第9図	柴立遺跡出土遺物	26
第10図	柴立遺跡出土遺物	27
第11図	小薄・有武遺跡出土遺物	28
第12図	大浦・神野牧遺跡出土遺物	29
第13図	神野牧遺跡出土の石器	30
第14図	上祓川遺跡群出土の石器	30
第15図	小浜遺跡出土の成川式土器	32
第16図	平原遺跡出土の成川式土器	33
第17図	国立鹿屋体育大学敷地内表探遺物	34
第18図	国立鹿屋体育大学敷地平面図およびトレンチ配置図	35
第19図	国立鹿屋体育大学試掘調査土層の柱状図	36
第20図	城元B・富田城・大泊貝塚出土遺物	38
第21図	遺跡所在地図	39

図 版 目 次

図版 1	上	引地遺跡 (2) 徳光ヶ丘遺跡 (3~11)	42
	下	徳光ヶ丘遺跡近景 (南方向を望む)	42
図版 2	上	隠畑遺跡 (12~14) 久木野々遺跡 (15~18) ハシバダン遺跡 (19~24) 青木殺遺跡 (25・26)	43
	下	観音ヶ尾遺跡 (27~31) ・出土状況	43
図版 3		大根田遺跡 (32~40) 辺塚遺跡 (44・45) 本地遺跡 (46)	44
図版 4		柴立遺跡 (47~55)	45
図版 5		小薄遺跡 (56~62) 城元B遺跡 (94~99) 富田城跡 (100) 大泊貝塚B地点 (101~103) 鹿屋体育大学	46
図版 6	上	有武遺跡 (63~64) 神野牧遺跡 (60~74)	47
	下	有武遺跡土層断面	47
図版 7	上	神野牧遺跡 (75) 上祓川遺跡 (76)	48
	下	大浦遺跡 (65) 大浦遺跡群内地下式横穴	48
図版 8	上	小浜遺跡 (77~82) 平原遺跡 (88~90)	49
	下	麓遺跡 (1) 引地遺跡出土状況	49
図版 9	上	国立鹿屋体育大学遠景 (北東方向を望む)	50
	下	国立鹿屋体育大学近景 (東方向を望む)	50
図版 10	上	国立鹿屋体育大学試掘トレンチ (25号トレンチ)	51
	下	国立鹿屋体育大学試掘トレンチ (2号トレンチ)	51

第1章 調査の経過

大隅半島の志布志湾岸沿いの平地は古墳が分布しており、古代史研究者の注目している地域である。なかでも、肝属川・串良川の流域は、肥よくな湿地帯を造りあげてきた。古代人達は、湿地帯を臨む条件の良い高台に居をかまえ、多くの遺跡地を残してきた。その後、稲作技術が導入され、この肥よくな湿地帯は、農耕地として活用されようになったと考えられる。一面の湿地帯は、水田へと生まれ変わっていった。この水田は、最も安定した生活を古代人に与えることになり、南九州唯一で最大の古墳時代の生産地帯へと発展していった。200mを越す大古墳や、50基以上もある古墳群がいたる所に造営されることとなった。これら各時代を反映する遺跡や遺物は、古代文化を解明するうえからもきわめて貴重である。しかし、これらの貴重な遺産も各地で行われる開発事業の影響を、避けることのできない状況にあるので、鹿児島県では、遺跡把握の必要性を重視し、全国遺跡分布調査の一環として、昭和50年度以降、文化庁の補助を得、各町村の理解と協力のもとに大隅地域文化財調査計画に基づき、分布調査を実施している。今回の調査も、その計画の一環であり昭和56年11月30日より昭和57年3月6日まで実施した。

調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査責任者	文化課長 猿渡侯昭
事務担当	文化課管理係長 川畑栄造 文化課管理主査 安藤幸次 文化課主事 山下玲子
調査担当	文化課主事 長野真一 文化財調査員 峯崎幸清

調査に当たっては、前年度と同様に文化庁全国遺跡分布調査要領にもとづき、埋蔵文化財を中必に分布調査を実施した。調査は、聞きとりによる確認や周知の遺跡の再確認も行ったが、その多くは悉皆調査である。また、今回の調査では、各町村の字図の作成、遺跡地の所有者名簿の作成も行った。さらに、国立鹿屋体育大学の建設予定地では、トレンチ発掘による確認調査を実施した。

調査地域は、田代町、内之浦町、鹿屋市の各市町の一部地区と輝北町の全域である。

調査にあたっては、関係市町の教育委員会及び税務課の協力を得た。

第2章 各町村の遺跡・遺物

第1節 輝北町の遺跡・遺物

輝北町内の遺跡・遺物

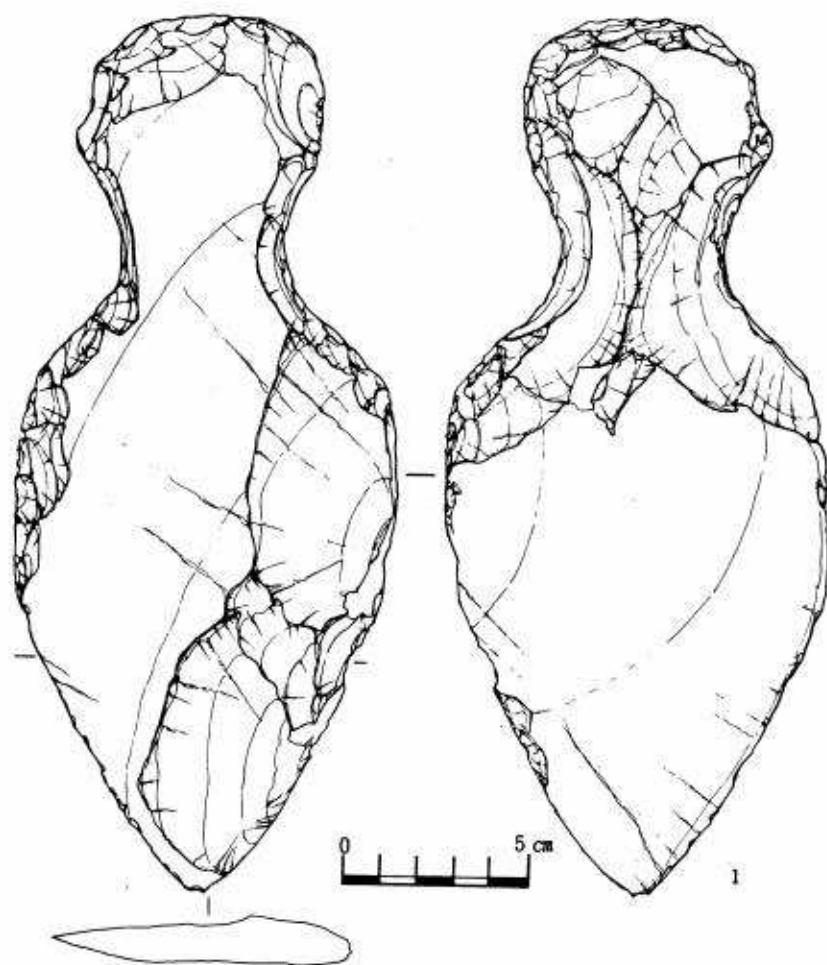
輝北町の分布調査は、昭和55年度に1回実施されており、今回は2回目である。今回の調査は、昭和57年1月6日より22日までの12日間実施した。

町内の遺跡は、文化庁発行の「全国遺跡地図―鹿児島県―」では、双子塚古墳、石ノ脇遺跡、麓遺跡、柏木遺跡、間手ノ木遺跡、上平房遺跡、松下遺跡、徳ヶ丘遺跡の8ヶ所が記載されていた。その後、この2年間の調査で25ヶ所と遺跡数は増加してきている。今回の調査では、周知の遺跡の再確認も行い、さらに数ヶ所の遺跡の追加ができていますので今後も増加していくものと思われる。

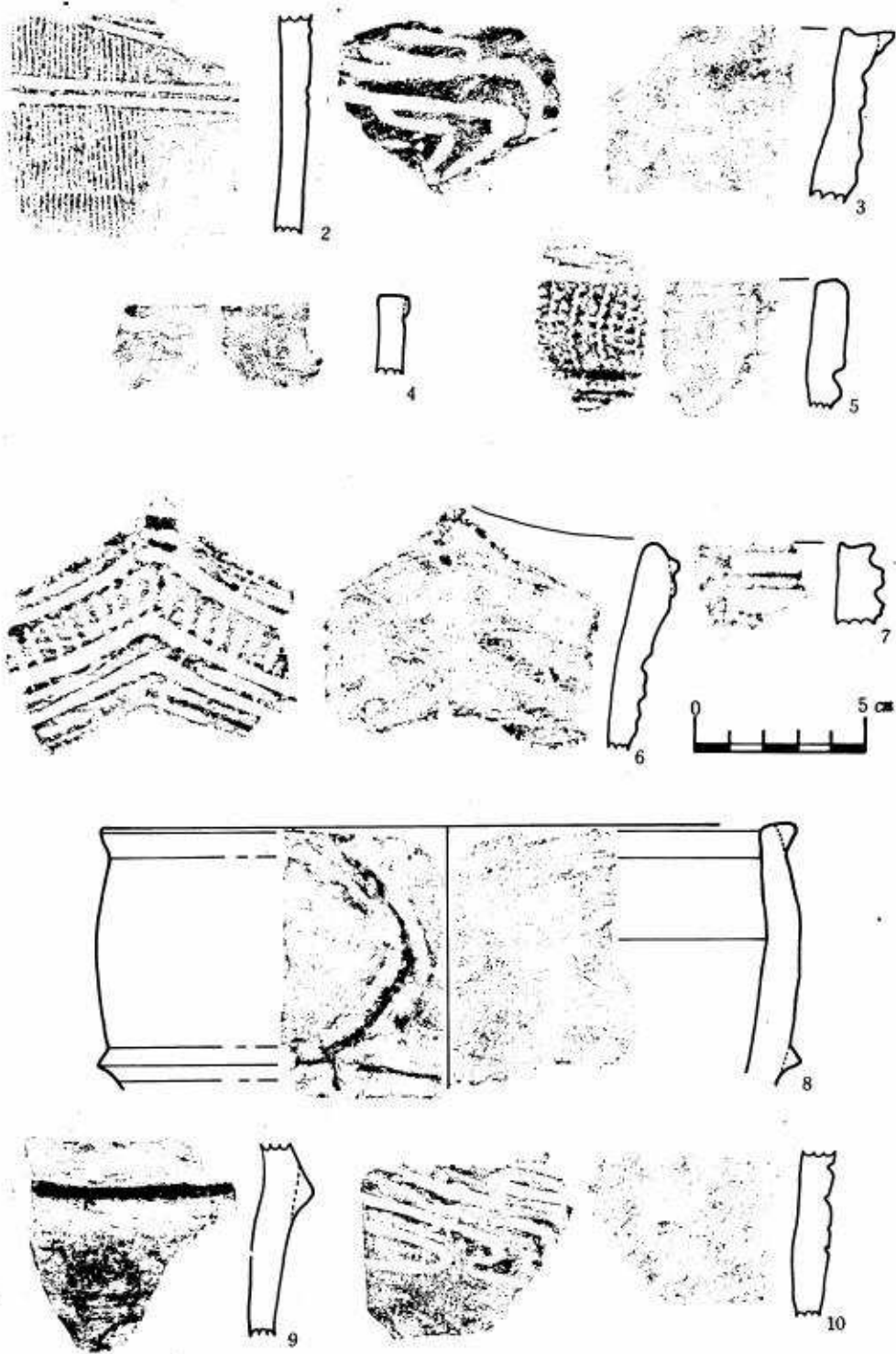
輝北町は、大隅半島のほぼ中央部に位置し、東方に大崎町、西方を垂水市、南に鹿屋市、北は福山町・大隅町へと四方を囲まれた行政区画をなしている。自然環境を見ると、町内には北西から南東へ流れる三本の梅ヶ渡川、平房川、堂籠川の河川がある。これら三本の河川が、シラス台地を侵食し、深い谷となり幅の狭い丘陵をつくりだしている。大隅町の最端部を北西より南東に流れる長江川と梅ヶ渡川によって作られた諏訪原丘陵に、朝倉、八重山、柏木、谷田等の集落が畑作農耕を営みながら発達し、これまでの調査でもハシバダン遺跡(12)、堀込遺跡(9)、倉谷遺跡(10)、柏木遺跡(2)等が知られている。これらの遺跡は、丘陵の中央部から梅ヶ渡川によって形成された南向きの段丘上に集中することを観ることができる。また梅ヶ渡川と平房川の侵食により市成丘陵がつくり出され、市成、宮園、浮半田等の集落がやはり畑地農耕を営みながら発達している。遺跡は、市成市街地の北方に諏訪神社遺跡(25)に中世期の集落地が認められ、久木野々遺跡(18)では、縄文時代後期の遺跡が大量に発見されている。青木段遺跡(5)では、耕作中に青磁器の小皿の完形品が数点重ねられ、大量の炭化物と共に偶然発見された経緯をもっており、今でも陶磁器類が採集される。平房川と堂籠川に挟まれた丘陵が最も広く、行政の中心地となっている百引、平房丘陵を形成している。遺跡地も多く見られ、引地遺跡(16)からは縄文時代早期の遺物が出土している。また、縄文時代後期の遺物を主体とする、観音ヶ尾遺跡(17)、隠畑遺跡(15)、徳光ヶ丘遺跡(8)がある。特に、徳光ヶ丘遺跡は、遺物の分布する面積、採集される量共にも多く、長い間に多くの人々によって集められている。麓遺跡(7)は、輝北町郷土史研究の先駆者であった故鶴田和夫氏が紹介した遺跡であり鶴田氏の宅地周辺に存在している。出土品は、弥生時代の土器片と石器等が出土し、鹿大生の鶴田君に紹介してもらい報告している。今回の調査に際して輝北町の教育長はじめ、社会教育課に理解と協力を得ると共に字図の作成は、同町税務課、市民課の協力を得た。同町出身の鹿大生鶴田静彦君には、分布調査に同行してもらい、多くの面で能率的に調査を行うことができた。また、資料は脇田聰子・内田礼子両氏に協力していただいた。

〔I〕 麓遺跡（第1図・図版8、遺跡番号7）

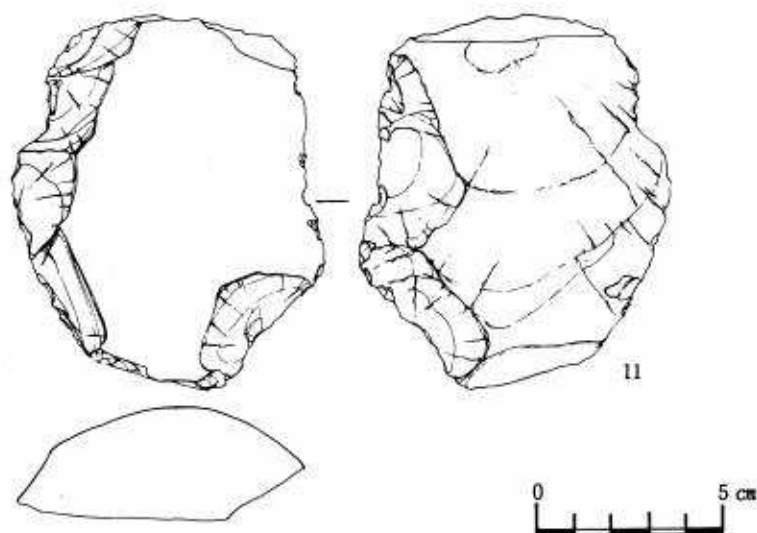
本遺跡は、昭和25年、石鏃と土器片、2点の石斧が耕作中に80m程の深さから、発見されたものである。本遺跡は、輝北町上百引麓にあり、海拔は260m程である。現在、鶴田氏の宅地となっている。発見者の鶴田和夫氏の記録では、土器片、石鏃とともに2点の石斧が折り重なって出土したと伝えられているが、昭和45年に死去したためにそれ以上の詳しいことはわかっていない。また、土器片と石斧、もう一本の石斧は所在が不明となり、現存しているのは、ここで報告する石斧が1点である。この石斧（有肩）は、長さ23.8cm最大幅10.1cmで、素材は硬質の頁岩を用いている。まず扁平で薄い剥片を取り出す作業より始まっており、特に、裏面には剥離痕がよく残されている。剥離の際、打点部となった表面の右側は、刃部の厚さを調整する目的で、3回にわたる調整剥離を行っている。



第1図 麓遺跡出土の有肩石斧



第2図 2・引地遺跡 3~10徳光ヶ丘遺跡



第3図 徳光ヶ丘遺跡出土石器

〔Ⅱ〕 引地遺跡 (第2図2, 図版1・8, 遺跡番号16)

輝北町下百引下平房引地の、畑地断面で採集した。竹下部落と下平房部落を結ぶ幹線添いの畑地で、附近には部落の納骨堂が建てられている。部分的には畑地整備が行われており、旧地形を留めていない場所もある。本遺跡より出土している遺物は、縄文時代早期の塞之神式土器であり、出土する層位は、鬼界カルデラ噴出物のアカホヤ層直下の粘質土層の中である。遺物は、胴部附近の破片と見られるもので燃系文と直交する関係で2本の沈線(3mm程の工具)が巡らされている。焼成は堅ろうで胎土には砂粒を多く含んでいる。図示できるのは、この1点だけであるが、少破片や焼石が多く散布し、壁面にも確認できる。

輝北町内で、この種の古い時代の遺物が発見されたのは初めてのことであり、今後古い層位の調査を進めて行けば関連する遺跡が広がっていくものと思われる。

〔Ⅲ〕 徳光ヶ丘遺跡 (第2～3～図, 3～11, 図版1・2)

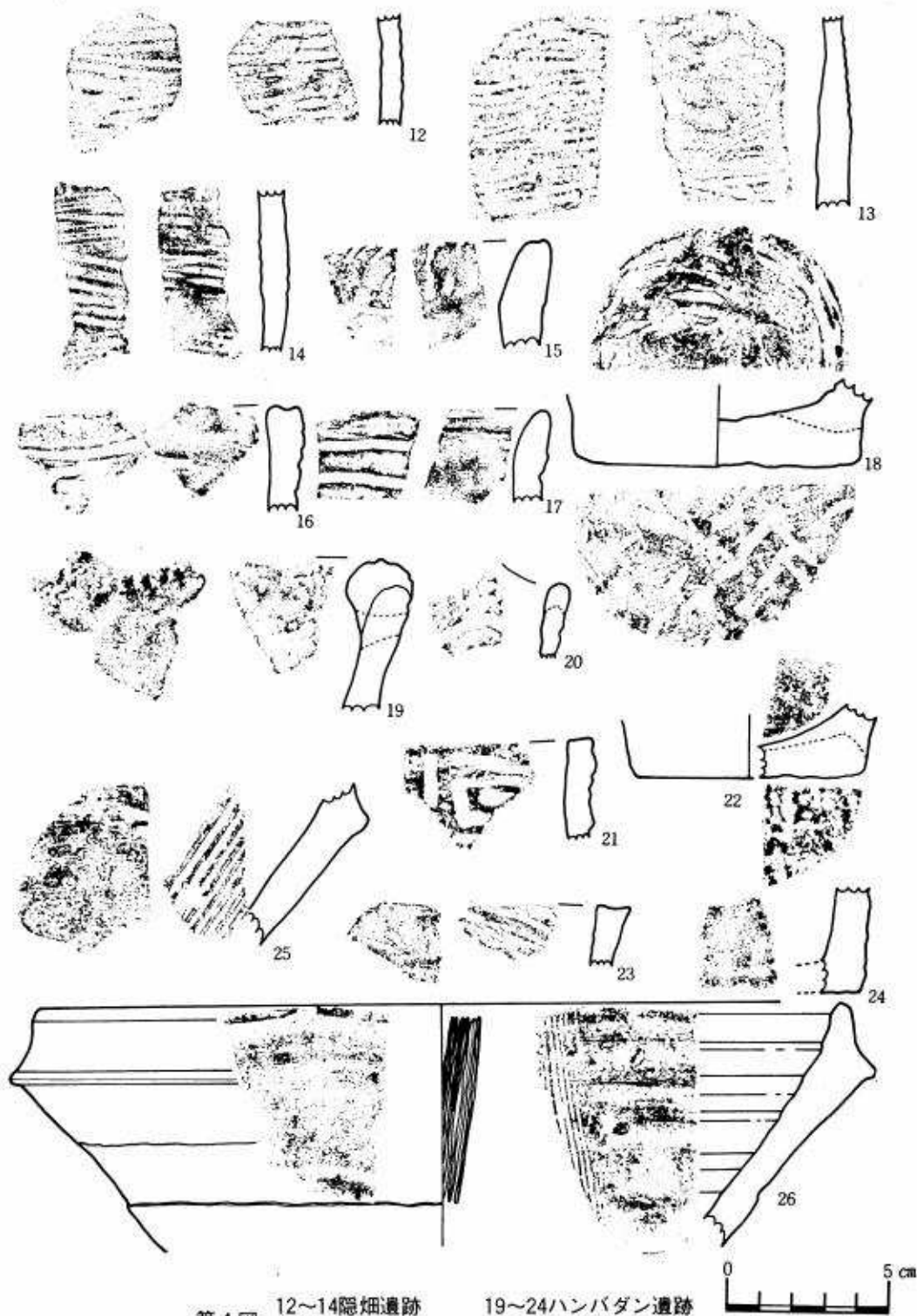
輝北町下百引東京別府、徳光ヶ丘にある縄文時代後期の集落遺跡である。遺跡は、南側に開けたゆるやかな傾斜面に立地し、北側は急傾斜となって落ち込んでいる。この遺跡が所在することは古くから知られており、研究者の中には採集を中心とした調査を行っている者もある。

しかし、近年、畑地の整備作業が行われ、多量の出土遺物があり、一部は町公民館の展示ケースに納められている。現在も、遺物はかなりの範囲に分布し、いたる所で採集できる。

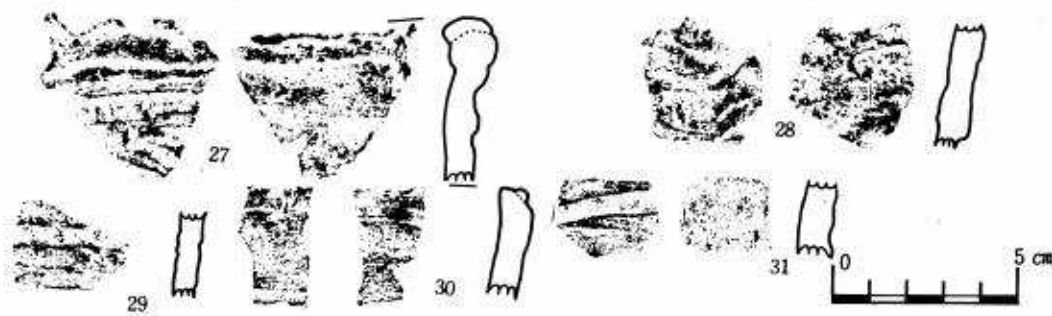
3は、口唇部が外側に引き出され、上面が凹面状を呈している口縁部破片で、沈線文が不規則に描かれている。器面の整形は、指頭で行い丁寧である。胎土には、やや砂粒を含み、焼成は良く全体として光沢をもった仕上げとなっている。4は、平坦な口唇部をもち、口縁部が直行する器形である。器面の整形は、ヘラ状の工具で丁寧に行い光沢がある。胎土は砂粒を多く含み、やや軟質な焼成である。5は、外面に貝殻腹縁により縦方向の圧痕を連続して描いたもので、器面全体が赤褐色を呈している。口唇部には、斜めに数本の条痕が残されている。胎土にはやはり砂粒が多く、焼成はよく堅ろうである。圧痕文の下に巡らされる沈線文は、6mm程の大きさである。6は、山型に隆起する器形をなすもので、隆起部に起点をもつ4本の平行沈線文が認められる。1本めと2本めの沈線文の間には、貝殻腹縁による圧痕文が施される。胎土には多くの砂粒を含み、2～3mm程の小石も含んでいる。整形は、貝殻を用い、更に、指頭で調整を行っている。この種の文様は、近くでは末吉町宮之迫遺跡、遠くは宮崎県綾遺跡や尾高貝塚に類似を求めることができる。7は、口唇部が凹面を呈するもので、横走る沈線で文様を構成している。胎土には砂粒を含んでいるが、焼成はきわめてよく堅ろうである。8は、胴部からやや内反する器形の土器で、三角形の粘土帯を貼りつけている。粘土帯は、口唇部外面と胴部最上位に貼りつけ、更に、2本の粘土帯を結ぶ帯が1本貼りつけられている。粘土帯の接合作業は、ヘラ状の工具でくり返し行い、器面の整形もヘラ状工具で横位に行っている。胎土には、多くの砂粒、小石を含みザラザラしている。9は、外面に化粧土（赤い丹塗様）を用いたもので、横走る整形が入念に行われている。粘土帯は、8と類似している。内外面ともに整形は、ヘラ状工具で入念に行い光沢をもっている。10は、文様をもつ破片で3mm程の沈線文が描かれる。胎土は多くの砂粒を含んでいるが、焼成は良く堅ろうな仕上がりとなっている。石器も数点採集している。特に町公民館の展示ケースの中には、石皿やすり石、石斧等が展示されている。石斧の製作は、敲打技法により石器の形状を整えた後、使用部を磨いたもの、また、打製技術がみられる。11は、礫面をもつ剥片を利用したもので、剥片の三面を表裏より調整し、石斧状に仕上げで使用したもので、主に下部を使用している。石材は、硬質の頁岩である。

〔Ⅳ〕 隠畑（かくしばた）遺跡（第4図12～13、図版2）

輝北町上百引隠畑、本遺跡は昨年度の調査で確認されたもので、今回は再度調査を実施した。その結果、遺跡は、堂籠川によって形成された北向きの段丘上に立地している。現在、この遺跡は、畑地利用のための土取りがすでに終了して、主体部分はすでに削り取られている。採集できる量は多く、縄文時代後期の遺跡である。遺物は全て胴部等の破片である。12～14は、器面の表裏ともに貝殻により条痕を横位に用いて整形を行っている。これらの外、すり石等の破片や焼石等が多く散布している。



第4図 12~14隠畑遺跡 19~24ハンバダン遺跡
15~18久木野々遺跡 25・26青木段遺跡



第5図 観音ヶ尾遺跡

〔V〕久木野々遺跡（第4図15～18，図版2）

輝北町市成久木野々，平房川の上流に位置し，久木野々部落の入口部の畑地に多く散布している。この一帯は，未だ，畑地の整備事業が実施されていないので，遺跡の保存は良好である。15は，口縁部がくの字形に外反する形状を呈し，口唇部の内外面に斜めの沈線文の文様を描いている。内面に施す文様は，口唇部上面より行い，外面の文様は口唇部より行っている。胎土には3～4mm程の小石を多数含み，整形は条痕仕上げと思われる。16は，口唇部に一条の沈線文をもち，外面は，4mm程のへら状の工具（複数のスジが観察できる）で沈線文様を施している。内面の整形は，指頭で行い，外面は風化が激しく明らかでない。又，外面には多量のススが附着している。17は，口唇部近くで粘土を切り取られた状態で，くの字状に屈曲するもので，沈線文は16とよく類似している。18は，組織圧痕をもつ底部である。底部は粘土盤を貼りつけた跡が認められ，内面の接着は指頭で円を描きながら行われている。

〔VI〕ハシバダン遺跡（第4図19～24，図版2）

輝北町市成諏訪原ハシバダン，諏訪原台地から梅ヶ渡川を遠く見落とす台地上にあり，八重山部落と市成を結ぶ幹線に添った広い範囲に分布している。縄文時代後期の遺跡で，すでに畑地整備事業が完了し，一部は破壊されているものと思われる。19は，口唇部に飾りのついたもので，飾りの稜部，口唇部外面にはキザミのある工具により刺突文が描かれる。又，孔がうがってあったと思われ，飾り部は主に内面側に貼り着けられている。器面整形は指頭の痕跡が観察できる。20は，口縁部が山形に隆起するもので，口唇部と沈線文の間に貝殻による圧痕文が施される。先の徳光ヶ丘遺跡出土の土器と類似した文様をもっている。21の口唇部は平坦な形状をもち，半載竹管により沈線文が描かれている。整形は入念に行われ，胎土もきめの細かいものを用いている。22は組織圧痕をもつ底部で，胎土は粗く多くの小石を含んでいる。

〔VII〕青木段遺跡（第4図25～26，図版2）

輝北町百引下平房青木段，下平房部落の西側の台地上にあり大崎町と接する所である。開墾

時に青磁皿数枚と炭化物が一緒に出てきた経緯がある。その時の青磁の小皿は現在2個が個人によって所蔵されている。今回は、スリ鉢の破片と磁器類が少量採集でき、何らかの遺構があったと推定されるが、畑地のため今後の確認は、かなり困難な状況がある。

〔Ⅶ〕観音ヶ尾遺跡（第5図27～31、図版2）

昨年発見した遺跡で上百引岳野に位置し、道跡改修工事の時に露出し、今でも道路の壁面に含まれている。縄文時代後期の遺跡で、27は口唇部が厚く造られ内面は押圧、外面は粘土の切り取りを行い波状に仕上げている。全ての土器片にヘラ状工具による沈線文が施され、徳光ヶ丘、ハシバダン遺跡出土に近い文様構成をみることができる。

	遺跡名	所在地	登録番号(文化庁)	備考
1	双子塚	輝北町市成諏訪原双子塚	14-22	古墳(方円)
2	柏木	〃 〃 柏木	14-39・40	
3	間手ノ木	〃 市成間手ノ木	14-41	
4	上平房	〃 百引上平房	14-42	
5	青木段	〃 百引下平房	14-61	松下遺跡と呼ばれていた?
6	石ノ脇	〃 石ノ脇受宮ウサン山	14-37	
7	麓	〃 麓	14-38	弥生時代(土器片・有肩石斧等)
8	徳光ヶ丘	〃 下百引東京別府	14-62	縄文時代後期(土器片・石皿等)
9	堀込	〃 市成堀込		
10	倉谷	〃 〃 倉谷		
11	柚木山	〃 〃 諏訪原柚木山		
12	ハシバダン	〃 〃 諏訪原ハシバダン		縄文時代後期(畑地)
13	釣掛段	〃 市成釣掛段		
14	柏木(第2)	〃 〃 諏訪原柏木		
15	隠畑	〃 上百引隠畑		縄文時代後期(畑地)
16	引地	〃 下百引下平房引地		縄文時代早期(畑地)
17	観音ヶ尾	〃 上百引岳野		縄文時代後期(道路・山林・畑地)
18	久木野々	〃 市成久木野々		縄文時代後期(畑地)
19	垂野城址	〃 市成		
20	加瀬田ヶ城	〃 平房中平房		室町時代(肝属兼隆)
21	くずれ城	〃 下百引坂下		開墾により滅失
22	本城	〃 〃		畑地
23	西原城	〃 上百引百引		現在城山公園
24	白岩城	〃 上百引風呂段		荒地・山林
25	諏訪神社	〃 市成諏訪原		歴史時代(境内・水田)

第2節 田代町の調査

田代町の分布調査は、今年度が始めてである。調査は、昭和57年1月25日より1月29日まで5日間実施してきた。

田代町内の遺跡は、文化庁発行の「全国遺跡地図―鹿児島県―」で、5ヶ所が記載されているだけであるが、今回の調査でも確認された遺跡は8ヶ所の報告にとどまっている。したがって、周知の遺跡の再確認も行い、遺跡地の範囲等の綿密調査を実施してきた。調査には、田代町教育長をはじめ、社会教育課、井上洋一社会教育主事等の援助と協力をもらい終了することができた。また、折小野克代、田原まり子の2名には、町内の字図の複写、所有者名簿の作成を行ってもらった。これらの字図の作成は町税務課の協力できたものです。

田代町は、国見山系によって内之浦町、佐多町、高山町と区画され、その国見山系に源を発する2本の麓川と雄川（花瀬川）によりできた段丘、丘陵に集落が形成され、水田は河川添いにおおむね広がるだけで、住民の多くは畑作農耕と林業によって生計を営んでいる。これまでの調査では、麓川の流域に遺跡は集中して発見されており、雄川流域にはわずかに荒田遺跡（8）が知られているだけである。荒田遺跡は、大原中学校周辺の畑地に縄文時代後期の遺物と古墳時代の土器片を出土している。大根田遺跡（1）は、悉皆調査の結果、現在人家の集中している大根田・駄床・馬場頭・曲迫に広がる拡大な遺跡地であることが判明した。出土する遺物のほとんどは弥生時代中期を中心とするもので、人家の庭先や菜園に出土している。勝尾城（2）は、雄川と麓川の合流する地点の丘陵を利用して造営されているもので、本城、東城、西城よりなり西ノ城、城内という2つの字名が今でも残されている。宝光寺跡（3）は、現在の南大隅高校田代分校の敷地内にあったといわれ、明治の廃仏毀釈により取り壊されたとされている。現在でも大日如来像が残され、最近近くの水田から仁王像の片足が発見され、寺のあったことを裏づけている。岩崎遺跡（4）は、以前発掘調査が行われており、岩崎式土器の標準遺跡として今まで保存されてきている。

田代町遺跡地名表

	遺跡名	所在地	登録番号(文化庁)	備考
1	大根田	田代町麓大根田	23-109	弥生時代中期集落・タタラ跡
2	勝尾城	〃 〃	23-110	本城・東城・西城
3	宝光寺跡	〃 麓橋ノ口		寺跡(大日如来像・仁王像)
4	岩崎	〃 麓岩崎	23-112	縄文時代後期(発掘調査)
5	原田城	〃 麓山ノ口		田代氏五世刊部少補久助の居城
6	大手越	〃 川原大手越	23-111	縄文時代(後期)、弥生時代
7	大牟礼	〃 新田峠	23-113	
8	荒田	〃 大原荒田原		縄文時代

(1) 大根田遺跡 (第6・7図, 図版3)

田代町麓大根田を中心とする広範囲な遺跡である。この遺跡は、大根田、駄床、馬場頭、曲迫の4つの字地に広がっている。大根占から田代町への幹線道路(大根占, 田代線)添にあり大根田バス停が最もわかりやすい目安である。麓川によってつくられたわずかばかりの水田を南方にもつ、海拔185m程の南向きの台地である。一帯は、すでに人家が密集し、庭先や菜園等に遺物の散布がみられる。

第6図、7図で紹介した遺物は、岩下尚之氏の菜園より出土したもので岩下氏の氏神様の中に納められていたものを拝借したものである。

32~36, 38~40は一括資料と考えられ、弥生時代中期の遺物である。38は、底部径8.0cmで底部外面はやや丸みを持ち、段がつき一本の沈線文がつく。底面は、やや凹面をなしている。底面の器形は、ヘラでナデたあと指頭で輪を描きながら仕上げを行っている。脚部と胴部の接合は、指頭で行い指頭圧痕が残される。器面調整は、ヘラで縦方向にナデ仕上げを行っている。胎土は、3~4mmの小石砂粒を多量に含んでいる。焼成は、よく淡褐色を呈している。器種は、甕形土器である。34も甕形土器で、33よりも一回り小型で底部径は6.9cmである。底部外面は、明らかな段を持ちほぼ垂直な形球をなしている。器面調整は、ヘラによるナデ仕上げで行われ、調整痕がよく観察される。胎土には、多くの砂粒を含み、焼成は良好である。38は、甕形土器の口縁部で逆し字状を呈し、一本の沈線が巡らされている。器面調整は、ナデである。35は、粘板岩、36は、硬質砂岩を用いた石斧で、敲打技法により形状を整えた後、使用部分を磨き出している。37は瓦器質の焼き物で火鉢等に使われたと思われる。43は、すり鉢で窯は不明である。

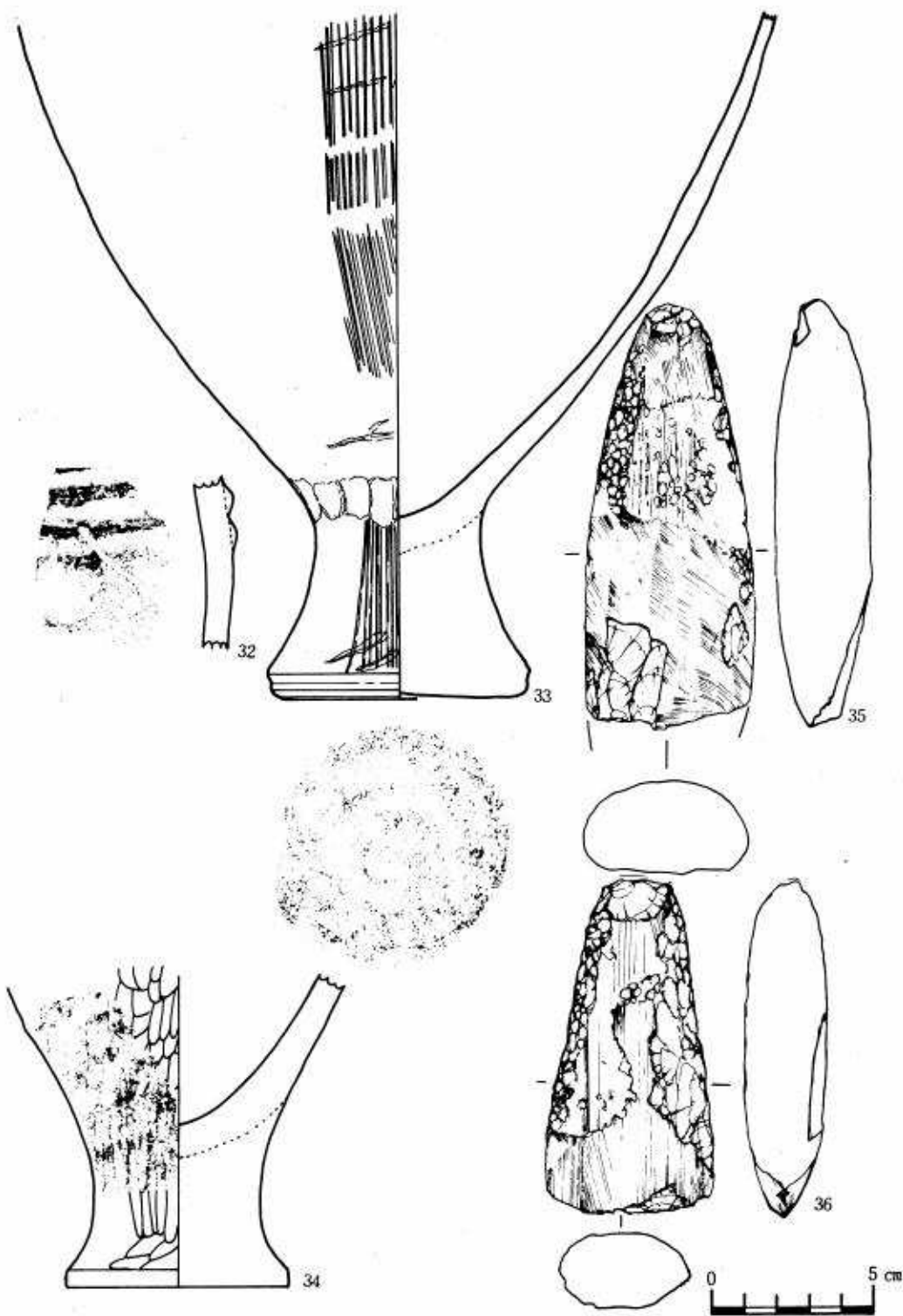
又、ここでは図示していないが、タタラ跡と思われる遺構があり、大量の鉄さい、フイゴ等が層をなして堆積している。このタタラ跡は、人家の庭先にあり早急な保存対策が必要と思われる。

(2) 岩崎遺跡 田代町麓岩崎

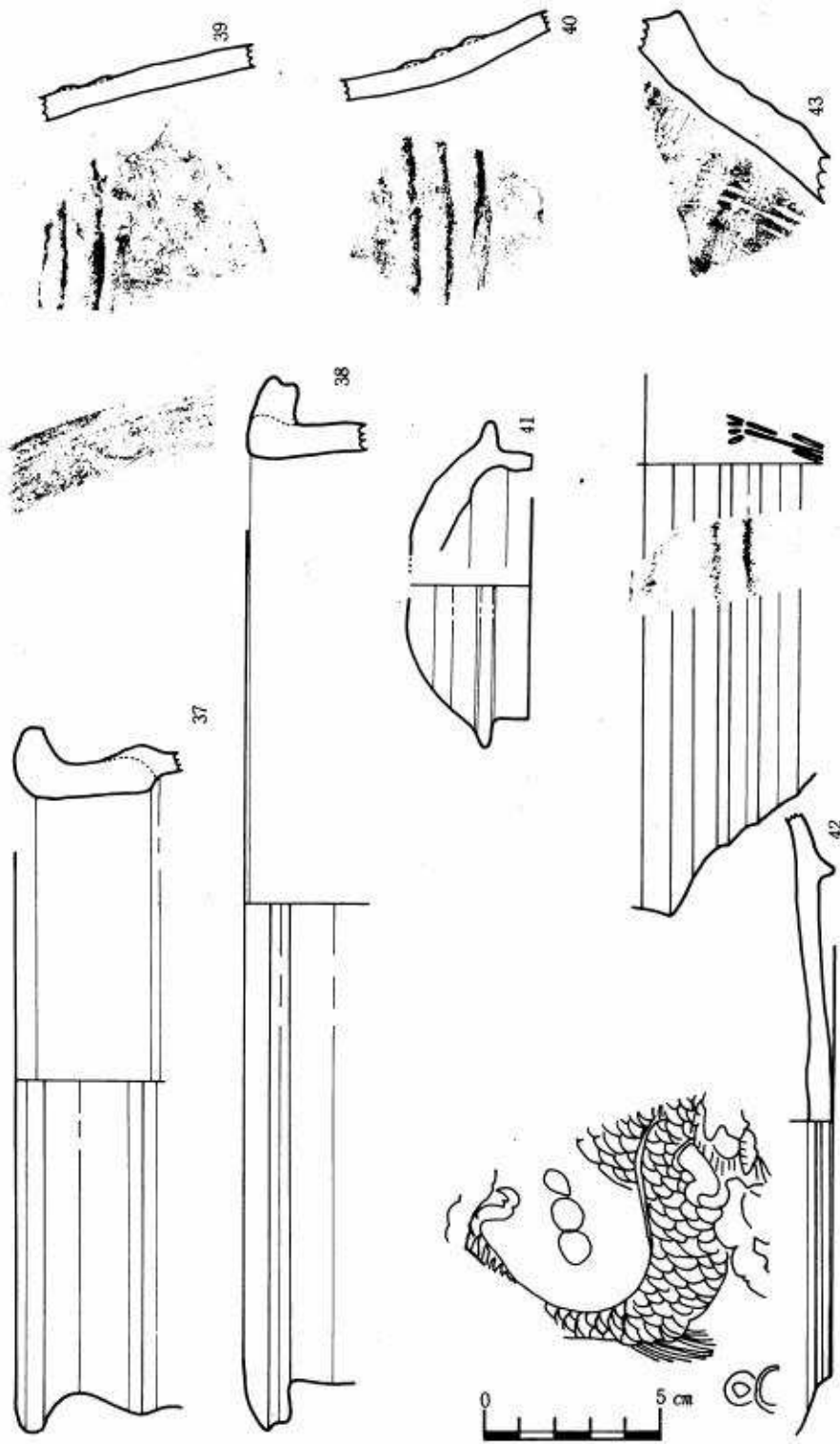
昭和25年発掘調査が行われ、岩崎上層式・岩崎下層式の2種の土器が発見されている。標高240mで岩崎神社の裏の畑地、傾斜地にあり現在はそのまま現状を保っている。

(3) 荒田遺跡 田代町大原荒田原

雄川の上流、倉谷と浦地を結ぶ一帯が遺跡で、主に縄文時代後期の遺物が散布している。また、古墳時代~歴史時代にかけての遺物も少量発見されている。遺跡の中心は、大原中学校の周辺に広がる茶畑で、雄川に面した南向きの丘陵地に立地している。しかし、この一帯も畑地整備事業や個人による開地がさかんに行われておりいたる所で古い地層が露出し遺跡の保存は保たれていない。



第6図 大根田遺跡出土弥生土器及び石斧



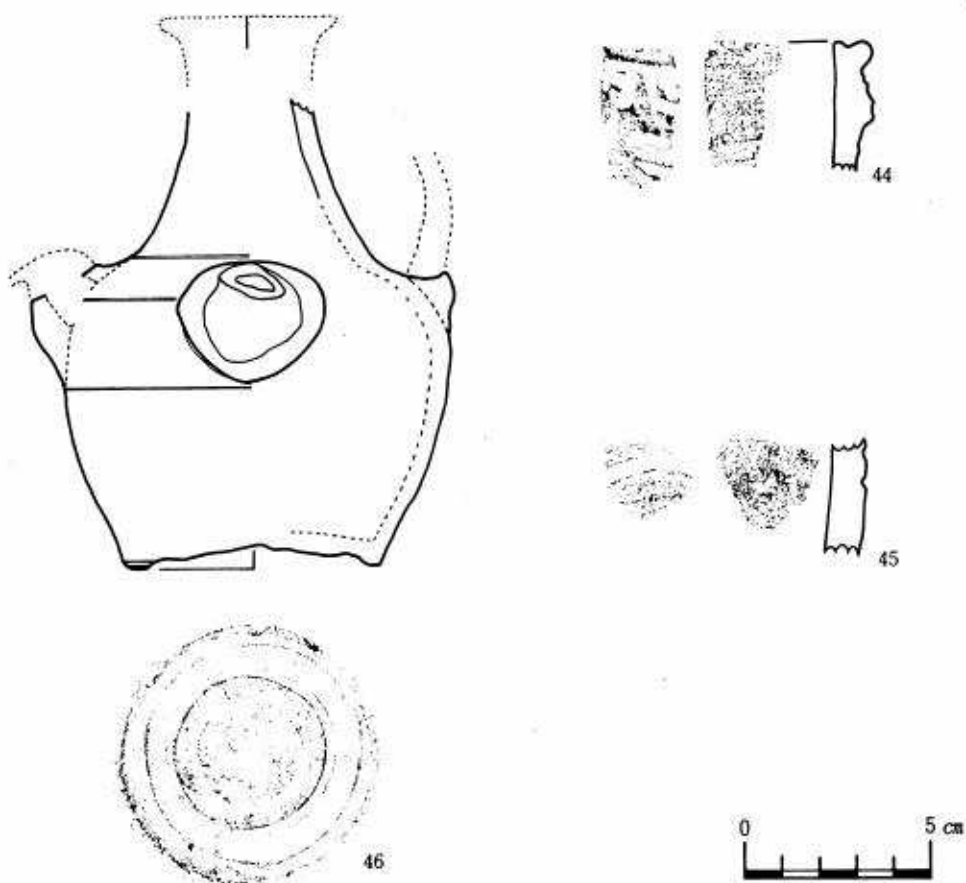
第7図 37~40 大根田遺跡出土弥生土器
 41~43 大根田遺跡出土中世・近世の遺物

第3節 内之浦町の調査

内之浦町の調査は、今年度が最初の調査である。昭和56年12月14日から19日までの6日間実施した。

内之浦は、大隅半島の東岸の先端部に位置し、西側は国見山系に取り囲まれ、国見山系より急激に太平洋に落ち込む地形をなしている。また、太平洋に面した海岸線は、太平洋の荒波により絶えず浸食が続き、到るところで海岸線は100m近い垂直な断崖を形づくっている。従って、集落の営なまれる場所はきわめて少なく、狭少な沖積地に人家は集中している。内之浦町社会教育課、上村実社会教育主事、神田香氏には中心となって協力してもらい、また、永井守氏には同行され遺跡案内、紹介等をしてもらった。伊地知恵子さんには、町内の字図の複写、所有者名簿の作成を協力してもらった。

これまでの調査で、遺跡の最も多く発見できたのは、内之浦の行政の中心地となっている内之浦湾に面した地帯で、津房川、広瀬川、小田川の三本の河川が海岸線に連なる砂丘との間に水田を形成させている。最も大きく広がっている遺跡に柵ノ木前田遺跡群(21)があり、これまでは、柵ノ木遺跡、高野神社、高野神社跡遺跡、柵ノ木前田遺跡と個別に知られていたが、今回の調査の結果、これらはすべて連続した一連の遺跡地であることが判明し、一括して柵ノ木前田遺跡群と呼ぶことにした。この大集落は、現代の集落を含む一帯にあり古墳時代・歴史時代の遺物を大量に出土し、人家のいたる所で採集できる。従って、古墳時代以降、この一帯が連続して生活の中心地となったことがうかがえる。水尻遺跡(3)では、石匙が採集されたことがあり、縄文時代後期の遺跡として紹介されてきたが、今回の調査では、縄文時代の遺物の採集はできず、代わりに古墳時代の土器片を数点採集している。荒田城(6)は、北方平牟田の丘陵地にあり、中世山城の跡とされている。今回は、弥生時代の土器片を少量採集したが今のところ直接山城を結びつけられる遺物は確認できていない。馬込遺跡(8)、赤木屋遺跡(9)、松生遺跡(10)は、それぞれ丘陵地や独立丘陵に営なまれた古墳時代を中心とした遺跡であり、この古墳時代においては、沖積平野を生活舞台とした柵ノ木前田遺跡群と馬込遺跡等の丘陵地や独立丘陵上に生活した2つの生活様式のあったことがうかがえ、興味深い遺跡様相を示している。岸良も内之浦と同じような地形をもち、久保田川によってつくられたわずかばかりの水田をもっている。本地遺跡(19)は、岸良氏の館と墓地を中心とした遺跡であり、岸良氏墓地より緑釉陶器の水注を採集している。辺塚は、一ノ谷川が中央部を走り、辺塚遺跡群(22)を形成している。この遺跡群もこれまで高鉾神社、高鉾様遺跡、辺塚遺跡と個別によばれていた。今回の調査で新たに発見した地点を含めて、一括して辺塚遺跡群とよぶこととした。この遺跡では、縄文時代後期と思われる土器片と古墳時代の土器片が出土している。姫門遺跡は、国見山系の山間部に営なまれた久保田川の支流に添った畑地にあり、古墳時代の土器片を多量に散布している。



第8図 44・45 辺塚遺跡
46 本地遺跡

〔Ⅰ〕 辺塚遺跡群（第8図44・45、図版3・遺跡番号22）

本遺跡は、内之浦町辺塚にあり、一の谷川と太平洋によって形成された砂丘地に所在する。周知の辺塚遺跡西側斜面に発見された遺跡で遺物は、縄文時代後期の土器片が多く分布し、44・45はその一部である。44は口縁部・45は胴部片で、いずれも沈線文を主体とする。

〔Ⅱ〕 本地遺跡（第8図46、図版3・遺跡番号19）

本遺跡は、内之浦町岸良本地にあり、久保田川によって形成された微高地に所在する。肝付一属である岸良氏の館址と墓地を含む遺跡である。46は墓地内で花差しとして使用されていたものである。器形は、注口部・頸部・取手部が欠損しているが、縁袖水注である。現存高12.7cm幅10.3cmを測り、器面全体に縁袖が施されている。底部には施釉が見られない。焼成は軟質で、施釉が厚いせいか剥落が著しく、下地が部分的にすけて見える。胴部に比べて頸部は光沢のない仕上がりである。県内では縁袖水注の出土はこれまで確認されていない。

内 之 浦 町

	遺跡名	所在地	登録番号(文化庁)	備考
1	海蔵の観音様	内之浦町小串海蔵	24-1	町指定文化財
2	小 串	＊ 小串	24-2	縄文時代後期(畑地・砂丘地)
3	水 尻	＊ 小串水尻	24-10	縄文時代(石匙・丘陵)
4	北 方	＊ 北方	24-8	
5	平 牟 田	＊ 北方平牟田	24-9	
6	荒 田 城	＊ ＊		中世山城・弥生土器片
7	坂 元	＊ 北方坂元	24-3	(畑地)
8	馬 込	＊ 北方馬込		古墳時代・歴史時代(丘陵地)
9	赤 木 屋	＊ 北方赤木屋		古墳時代土器片(小丘陵畑地)
10	松 生	＊ 北方松生	24-4	古墳時代土器片(独立小丘陵畑地)
11	川上城跡	＊ 北方平原		
12	江 平	＊ 南方江平	24-5	古墳時代土器片(畑地)
13	乙 田	＊ 南方乙田	24-7	
14	大 平 見	＊ 南方大平見	24-15	
15	佐 牟 田	＊ 南方佐牟田	24-6	
16	南 方	＊ 南方	24-16	
17	甕 田 城	＊ 南方小野	24-17	
18	小 山 田	＊ 岸良小山田	24-18	
19	本 地	＊ 岸良本地		岸良氏墓地(緑釉陶器・竹林)
20	浜	＊ 岸良浜	24-19	
21	柵ノ木前田遺跡群	＊ 北方柵木・前田	24-11~14	高屋神社・柵ノ木・高屋神社跡 柵ノ木前田遺跡
22	辺 塚	＊ 辺塚	26-3~5	高弁・高弁様遺跡・辺塚遺跡
23	姫 門	＊ 岸良姫門	23-96	散布地
24	姫 門 B	＊ ＊		古墳時代土器片(畑地)

第4節 鹿屋市内の調査

鹿屋市の分布調査は、昭和54年度に1回実施しており、今年度は継続事業として行い、2年次の調査である。

調査は、前期を昭和56年11月30日より12月12日までとし、後期を昭和57年2月1日から3月6日までとして2期にわけて行った。

なお、鹿屋市内の遺跡は、文化庁発行の「全国遺跡地図―鹿児島県―」では16ヶ所の遺跡の存在が知られていたが、この2年間の調査で61ヶ所と遺跡数は増加してきている。したがって、未だ調査を行っていない地域も多く残っており、今後ますます増加していくと思われる。

鹿屋市の自然環境と遺跡のあり方を概観すると、高隈山系と笠之原台地の接触地域を分断した状況で市内の中央部を肝属川が南北に流れている。この肝属川は、高隈山系より流れ出し南下しつつ狭少な水田と多くの段丘、丘陵を形成している。この河川域にはこれらの段丘、丘陵を利用して多くの遺跡が発達している。上祓川遺跡群(51)では、縄文時代後期から古墳時代にかけての集落遺構等が予想され、神野牧遺跡(4)では、縄文時代後期の遺物が大量に発見されている。現在発掘調査が進められている王子遺跡(7)は、弥生時代中期の住居址が数多く発掘されているが、これと接続すると思われる遺跡群に、堀之牧遺跡群(50)、石仏頭遺跡(52)、大窪遺跡(53)、楠原遺跡(54)があり、肝属川を望む同じ笠之原台地の西端にエンエンと広がっている。また、祓川地下式横穴群(55)からは、短甲と土師器線が出土し、これらは現在保存処置を行い鹿屋市公民館のロビーに展示してある。

さらに、下流で肝属川と合流する大始良川がほぼ東西に走り、多くの段丘を発達させている。特に、大始良町の附近では、段丘、丘陵のそのほとんどに遺跡が発達し、茶ノ上、藤崎遺跡(32)、永崎原遺跡(35)などがあり獅子目町では岡ノ前遺跡(38)、松尾遺跡(39)等が広がっている。また南町でも上原遺跡(42)、本坊遺跡(43)等が発見され縄文時代から古墳時代までの遺物が数多く採集されている。

また、高隈山系の南麓に端を発した高須川の上流域でも遺跡が発達し、縄文時代早期・前期・後期、古墳時代等の各遺物を出土する。小薄町・有武町・高牧町に広がる拡大なエリアの小薄町遺跡群(11)がある。この一帯では、縄文時代の古い遺物が発見され、層位的に観察できる場所もある。また、小薄町遺跡群の対岸にあたる柴立遺跡(12)も、新たに発見され縄文時代後期の遺物を大量に包含している。

以上のように、鹿屋市内で発見される遺物の多くは、河川域に集中する傾向をうかがうことができる。

今回の調査には鹿屋市教育委員会をはじめ、社会教育課、山之口充係長には、多くの援助協力をもらい調査をスムーズに進めることができた。また、渡野恭子、岩倉章子、上薩美智子、柳井谷加代子、玉利裕子、中塩屋育子、藤田絹子の各女氏に市内の字図の複写、字図の復元、地番調査、所有者名の調査等を行ってもらった。また、これらの字図調査は市税務課の協力を願った。

鹿屋市

	遺跡名	所在地	登録番号(文化庁)	備考
1	芝原	鹿屋市祓川芝原	19-26	
2	山外森	◇ 上祓川山外森	19-20	
3	中野	◇ 祓川	19-45	
4	神野牧	◇ 西祓川神野牧		縄文時代後期・晩期(畑地)
5	打馬?	◇ 打馬町		
6	平原古墳	◇ 打馬町平原	19-46	古墳(円)
7	王子	◇ 王子町王子		弥生時代中期集落跡(発掘調査)
8	大浦遺跡群	◇ 大浦町		縄文時代早期・地下式横穴(墓)
9	郷之原	◇ 郷之原	19-43	
10	川の上	◇ 大浦町松橋川の上	19-44	
11	小薄町遺跡群	◇ 小薄町・有武町・高牧町		縄文時代早期・前期・後期, 古墳時代
12	柴立	◇ 花岡町柴立		縄文時代後期・古墳時代(山林・畑地)
13	鶴羽城跡	◇ 花岡町鶴羽		鶴羽小敷地・丘陵
14	本戸口	◇ 海道町本戸口		
15	古里	◇ 古里		花岡中敷地縄文時代後期
16	キタバイ	◇ 高須町キタバイ	19-88	
17	谷平	◇ 横山町谷平	19-89	
18	松の岡	◇ ◇ 松の岡	19-90	
19	岡元	◇ ◇ 岡元	19-91	
20	老神	◇ 田崎町老神	19-92	古銭出土
21	笹ヶ尾	◇ 名貫町笹ヶ尾		弥生時代
22	東田ノ上	◇ 川西町東田ノ上		古墳時代・弥生時代
23	早馬原	◇ 川東町早馬原		歴史時代・古墳時代・弥生時代
24	早馬原B	◇		◇
25	飯隈	◇ 飯隈町飯隈・牧		古墳時代・弥生時代
26	枯木ヶ尾	◇ 古里町枯木ヶ尾		古墳時代・弥生時代
27	掛平	◇ 浜田町掛平		歴史時代・古墳時代・弥生時代
28	下西原	◇ 浜田町下西原		◇
29	浜田小南	◇ 浜田町	23-1	浜田小南
30	宮の尾	◇ 浜田町宮地宮の尾	23-2	
31	瀬筒原	◇ 大始良町瀬筒原下吹切		歴史時代・古墳時代・弥生時代
32	茶園ノ上・藤崎原	◇ ◇ 藤崎原		古墳時代・縄文時代

	遺跡名	所在地	登録番号(文化庁)	備考
33	田 淵 上	鹿屋市田淵町田淵上		古墳時代・縄文時代
34	小 永 崎	◇ 大始良町小永崎		歴史時代・古墳時代・弥生時代
35	永 崎 原	◇ ◇ 大始良西永崎原		◇
36	諏 訪 尾	◇ ◇ 大始良西諏訪尾		古墳時代・縄文時代
37	山 神	◇ ◇ 大始良東山神		縄文時代
38	岡 ノ 前	◇ 獅子目町岡ノ前		歴史時代・古墳時代
39	松 尾	◇ ◇ 松尾		歴史時代・古墳時代・弥生時代
40	上 田 原	◇ 獅子目重田上田原	23-7	
41	小 牧	◇ 萩塚町小牧		弥生時代
42	上 原	◇ 南町上原		古墳時代・弥生時代・縄文時代
43	本 坊	◇ 南町本坊		◇
44	島 元	◇ 南町島元		古墳時代・弥生時代
45	鎮 守 ヶ 迫	◇ 南町鎮守ヶ迫		古墳時代・弥生時代・縄文時代
46	本 村 原	◇ 大始良本村原	23-6	
47	皆 倉	大根占町神川皆倉	23-4	弥生時代・古墳時代
48	小 浜	鹿屋市浜田町		竹の崎遺跡を含む・古墳時代土器片布地
49	平 原	◇		古墳時代土器片散布地
50	堀之牧遺跡群	鹿屋市中祓川堀之牧		弥生時代中期・土器片散布地
51	上祓川遺跡群	◇ 上祓町 ?		縄文時代(後期)・古墳時代(須恵器)
52	石 仏 頭	◇ 中祓川石仏頭		古墳時代土器片散布地(畑地)
53	大 窪	◇ 上祓川大窪		縄文時代(後期)山林
54	橋 原	◇ 上祓川橋原		古墳時代土器片散布地(畑地)
55	祓川地下式横穴	◇ 祓川井上		昭和25年6月11日短甲, 甕出土
56	寿 三 丁 目	◇ 寿		古墳時代
57	曾 田	◇ 曾田町		◇
58	白 崎 町	鹿屋市白崎町		◇
59	寿 六 丁 目	◇ 寿		◇
60	川 東 町 1	◇ 川東町		◇
61	川 東 町 2	◇ ◇		◇
62	川 東 町 3	◇ ◇		◇

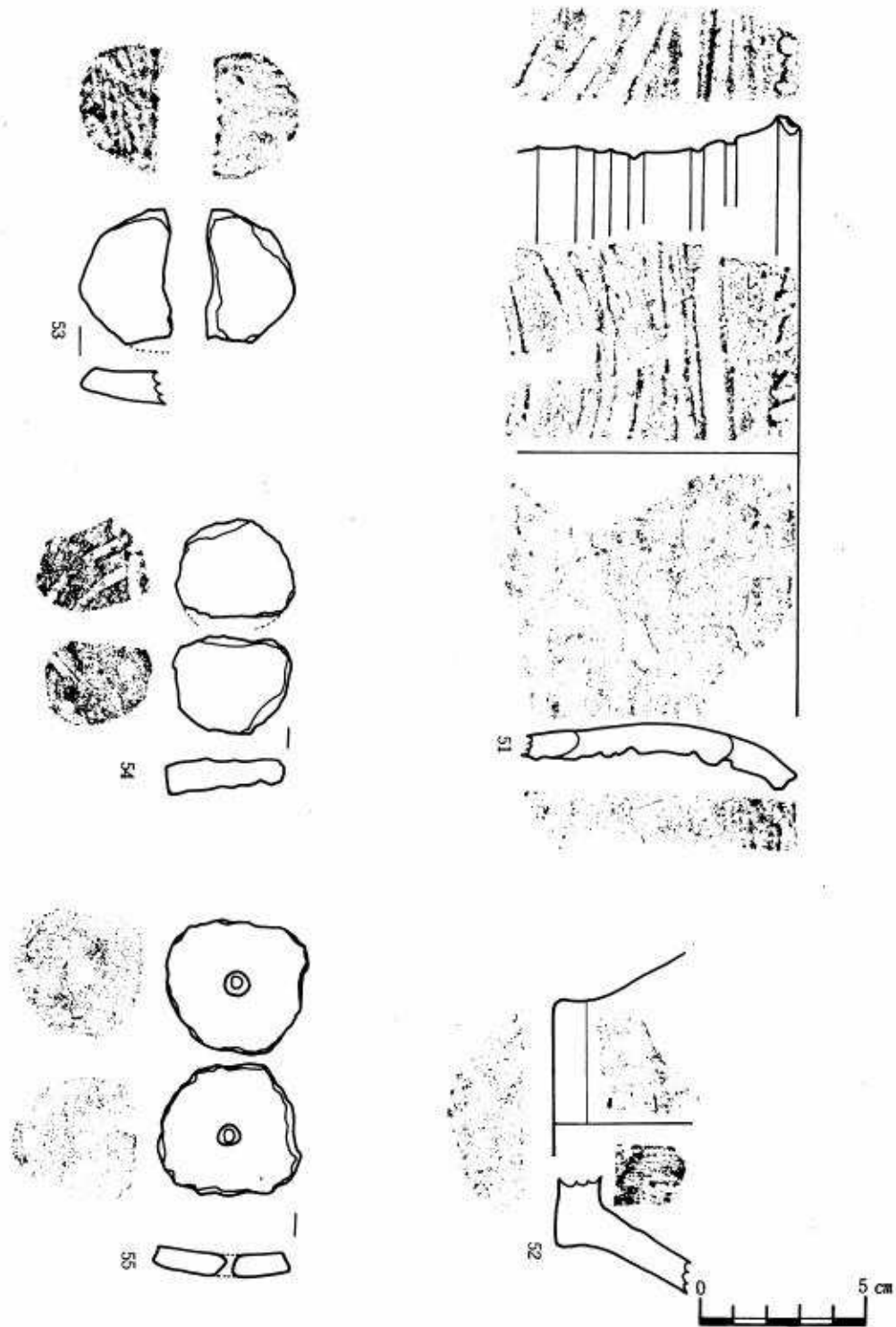
(1) 柴立遺跡 (第9図47~50, 10図51~55, 図版4)

鹿屋市花岡町柴立にあり、本白水ハル子さん所有の山林内に縄文時代後期の遺跡が存在している。国立鹿屋体育大学校敷地内の試掘調査中に通報があり本遺跡を確認できた。市立鶴羽小学校と花岡町の集落を結ぶ幹線道のほぼ中間部に遺跡があり、古墳時代の土器片も多く(主に畑地)散布している。高須川によって造られた、東向きの段丘上に立地している。戦後の開墾作業により多くの土器片の出土することが知られ、その後畑地から雑木山に代えられ、そのことが今では遺跡の保存に役立っている。

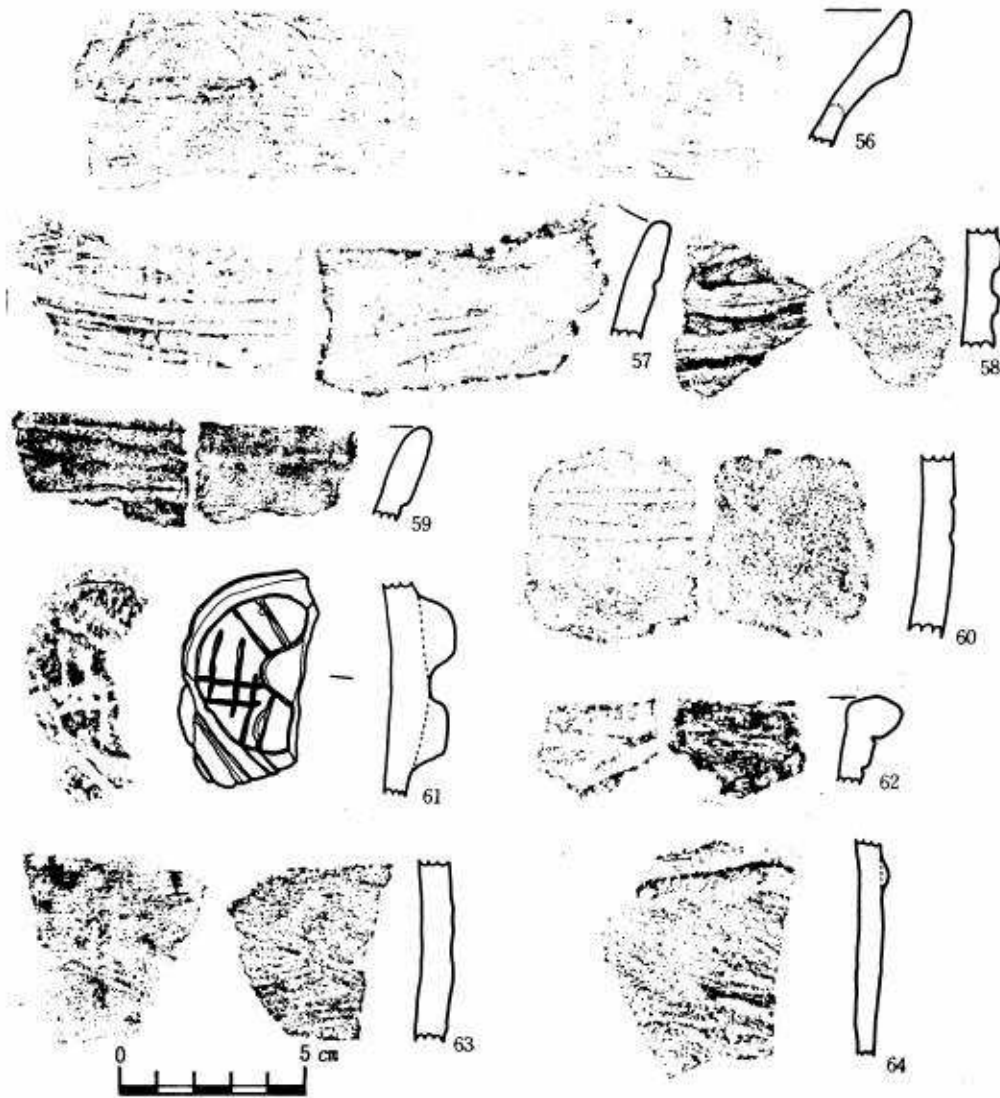
47は、頸部より外反する口縁部をなし、口唇部は平坦でやや外にはり出している。頸部には3本以上の沈線文が横走り、6mm程のヘラ状工具で施文している。器面整形はていねいに行われ、指頭でなでられ仕上っている。48は口縁部がやや隆起し、頂部に外面に貝殻腹線による斜めの押圧文が施される。頸部文様は浅い沈線文で、頂部より始まる平行線文となっている。焼成は極めて良く堅ろうである。内面の調整は棒状工具によったものと思われる。49は破片を接合したもので、頸部上部で締り、その後口縁部が外反する器形を呈している。胎土は多くの砂粒を含みさらに、雲母(金雲母)を多量に混合したものを用以でる。内面は貝殻条痕がよく残され、基本的に横方向で行なっている。外面では、胴部から下位に貝殻条痕文が見られ、文様帯は、さらに入念なで整形が行なわれ、その後指頭による太形凹線文様が施されている。太形凹線の幅は最大で10mm、平均6mm程である。50は、胴部の下位に近い破片と思われる。文様は、全て縦方向の不規則な沈線文で構成されている。外面の整形はていねいなで仕上げとなっているが、内面は粗く粘土の接合部の仕上げも行なわれず段が残されたままである。胎土には多くの砂粒を含み焼成も軟弱である。外面には多くのススが附着している。51は、復元口径19.7cm、口縁部が外反する深鉢形土器である。口唇部は外面に斜めに仕上げ、さらに刺突を行ないキザミ口縁風になっている。器面調整は、内外面ともに入念にナデ仕上げを行ない、光沢を出し、その後、沈線文を施している。この沈線文を描くための工具は半截竹管状のものと思われる。また、施文後の仕上げ整形は行なっておらず粘土のダマ、盛り上がりがあるまま残されている。胎土は、砂粒の多いものを用以焼成もやや軟質である。52、復元径が7.0mmの底部で、51等の深鉢形土器の底部に相当するものと思われる。外面の調整は、貝殻で行ない条痕文が下から上への方向で、内面は下から上へのやや斜めの方向で残されている。胎土は荒く大粒の砂粒が多く含まれている。53~54は土器の破片を用いた土製加工品(メンコ)で、2点とも全周にトリミングを行なっている。53・54は半損品、表面裏面ともに条痕文が残されている。55は中央部に孔をうがってある有孔円盤である。孔の通しは両面から行なっている。55の胎土には雲母(黒雲母)が多く混入している。

第9圖 柴立邊跡





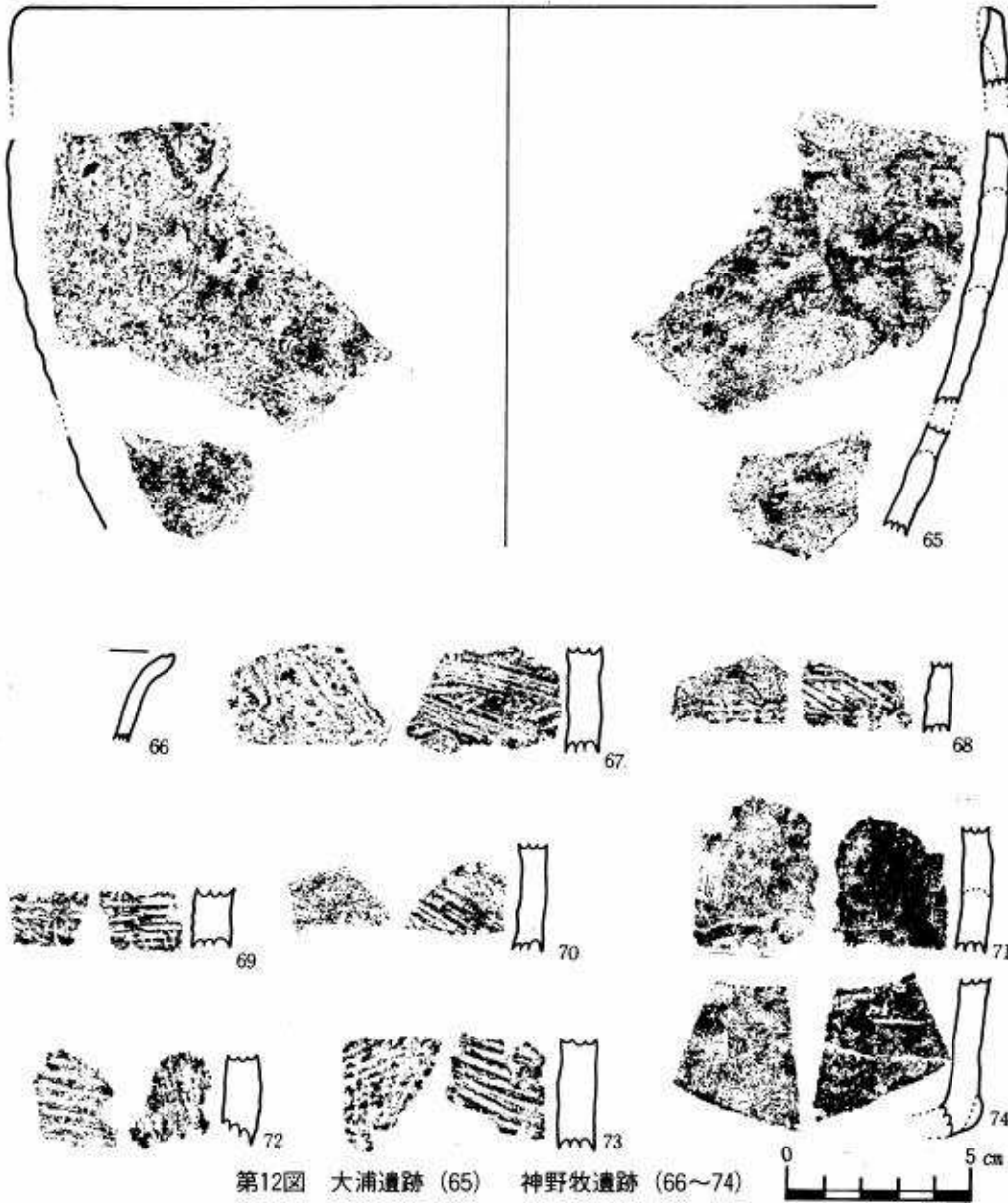
第10圖 柴 立 遺 跡



第11図 小薄遺跡 (56~62) 有武遺跡 (63・64)

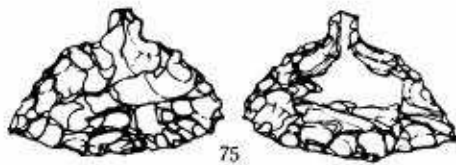
(2) 小薄 (おすき) 遺跡 (第11図56~62, 図版5)

小薄町遺跡群の中の1ヶ所で、海道町から小薄町、有武町を結ぶ幹線道路添の丘陵上に立地している。海道町と小薄町の中ほどには、古墳時代の遺物が散布する松の岡遺跡(18)があり、高須川をこしてはいりこんだ高隈山系の南麓部に位置している。付近には、小薄墓地、小薄町公民館、小薄公園等があり集落を含んだ近辺の畑地が遺跡の範囲である。この一帯は高地の集落である有武町、高牧町でも多くの遺跡地が散存している。小薄遺跡は、縄文時代後期の遺物が多く分布している。開発事業としては畑地整備事業が一部行なわれているものの現在では遺跡の保存は良好な状況を保っていると思われる。

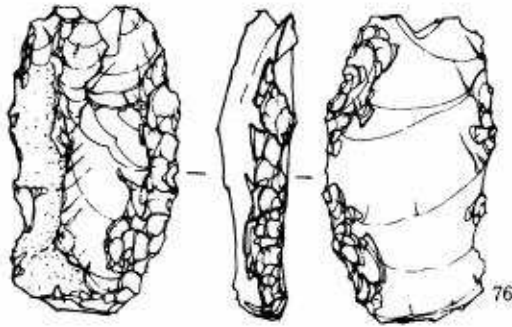


第12図 大浦遺跡 (65) 神野牧遺跡 (66~74)

56は、肥厚した口縁部をもち、肥厚した部分にへら状の鋭い工具で刺突線を斜方向に、直線、半月形状に描いている。内面での器面調整は、横位の条痕仕上げである。57は、口縁部が山状に突起する形状の深鉢形土器と思われる。口唇部はやや丸みをもち、指頭等によるナデ仕上げを行なっている。器面調整は内外面とも貝殻条痕文がみられる。文様帯は、貝殻条痕文による仕上げの後、そのままへら状工具で沈線文を巡らしている。胎土は、砂粒が多く含まれ石英粒が多く観察できる。焼成は、やや軟弱である。58は、胎土に多くの金雲母を含んでいる。文様は、指頭による太形凹線文である。焼成は、かなり軟質の仕上がりである。



第13図 神野牧遺跡出土石器



第14図 上絨川遺跡出土石器

59・57と同一個体と思われる口縁部破片で、外面には多くのススが付着している。60は、土製品（メンコ）とも考えられるもので、部分的にはトリミング様の加工痕もみられる。胎土には、多量の砂粒を含みザラザラしている。外面は、2本の細く浅い沈線文が巡っている。61は、頸部から口縁部付近に貼り着けられたものと思われ粘土帯の上面には、ヘラ状工具で格子状に刺突線で描いている。焼成は、極めて軟弱でポロポロ剥脱している。62は、口唇部中央部がやや高くなり稜を形成し、外面に厚くはり出している。外面の文様は、細くて鋭い沈線文を施している。胎土は、きめの細かい粘土を用い、焼成はよく堅ろうな出来ばえである。

(3) 有武遺跡 (第11図63・64, 図版6)

小薄町の北方の集落が有武町で、海拔は200～250m程である。この一帯は、火山灰の堆積が発達している地域で、桜島・鬼界・始良カルデラ等の噴出物が整然と堆積している。本遺跡では、縄文時代前期・早期の遺物の分布が確められる。露頭観察できる所では、アカホヤ層を挟んで上部に轟式土器、下部に貝殻条痕文が施文された前平式土器(円筒形土器)が重複している。又、それぞれの文化層の中には、多くの礫がみられ、焼石や炉址(?)も認められる。なお、石斧等の石器や黒曜石を用いた剥片も含まれている。63は、アカホヤ層より下の粘質で通称灰青色土層と呼ばれるの火山灰層中に出土したもので、内面は貝殻条痕文がよく残り、外面は貝殻条痕仕上げの後、更に丁寧なナデ仕上げを行なっている。胎土は砂粒が多く含まれ長石等が目立つ。焼成は良く堅ろうにしまっている。64は、アカホヤ層の上部(アカホヤ層は軽石層と火山灰層の2枚が観察できているが、この場合はアカホヤの火山灰層をベースとした風化、ないしは二次堆積のことである)に出土した遺物である。この土器片は、1本の隆線文をもち貝殻条痕文による器面調整を行なっている。内外面ともに斜めの方向に行なっている。隆線文は、粘土帯の貼りつけである。焼成は、極めて良く、叩くとカンカンと鳴る。外面には、多くのススの付着がある。

(4) 大浦遺跡 (第12図 65, 図版7)

鹿屋市大浦町にあり肝属川と高隈山系の麓との間に広がる台地の上に残された独立丘陵が遺跡地である。付近の台地は海拔70m程の高さを保ち、遺跡の立地する独立丘陵は80~90m程の高さをもっている。残念ながら最も条件の良い南側の丘陵は開墾が進み畑地となっている。出土する遺物は、アカホヤ層と桜島噴出物(通称パミスと呼ばれる)の間の黒色粘質土層にみられる。65は、全くの推定数値であるが、口径26cm程ある深鉢形土器で頸部から口縁部にかけてやや直立する傾向がうかがえる。胎土には、多くの砂粒を含んでいる。焼成は極めてよく堅ろうである。器厚は5mm程と薄く、粘土版を重ねて造りあげ、器面調整は全て指頭で行ない内外面ともにアコボコしている。

(5) 神野牧(かみのまき)遺跡 (第12図66~74; 図版7)

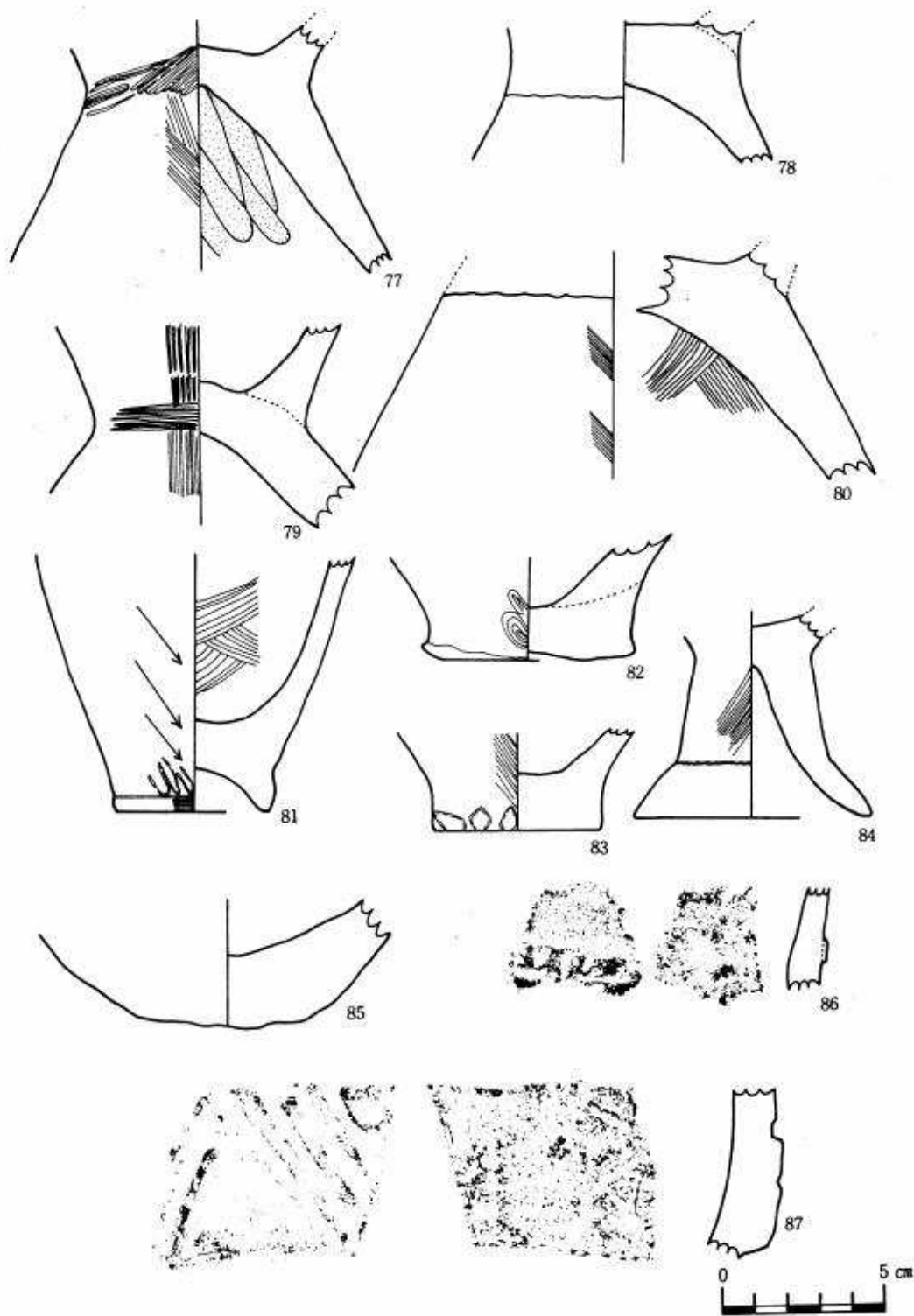
鹿屋市西祓川神野牧、大浦遺跡と同じ台地にあり、台地の東端に立地している。遺跡はかなりの範囲に広がり、採集遺物も多くなっている。この一帯は昭和45年に畑地整備事業が行なわれ、その工事中に大量の出土品のあったことが地元の人々の間で知られている。66は、ていねいなヘラ磨きが行なわれた器面をもち光沢もある。外反する部分が頸部に相当すると思われる。縄文時代後期の終り頃の遺物と思われる。器厚は薄く4mm程である。全て小破片であるが、全体に貝殻条痕文がよく残されている。72は、内面は横方向のがみられ、外面は縦方向にを行っている。74は、胴部の最下部で、ていねいなナデ整形を行なっている。全体的に砂粒の多い胎土を用い、焼成はやや軟弱である。75は、乳白色の珪石を用いた「横長の石匙」である。最大幅2.8cm、高さ2.0cmである。素材となった剥片は、厚手で結晶体の残されたものを用い、全周から石器の中央部へ剥離を繰り返している。刃部では、再度の細かい調整を施している。

(6) 上祓川(かみはらいがわ)遺跡 (第14図, 図版7)

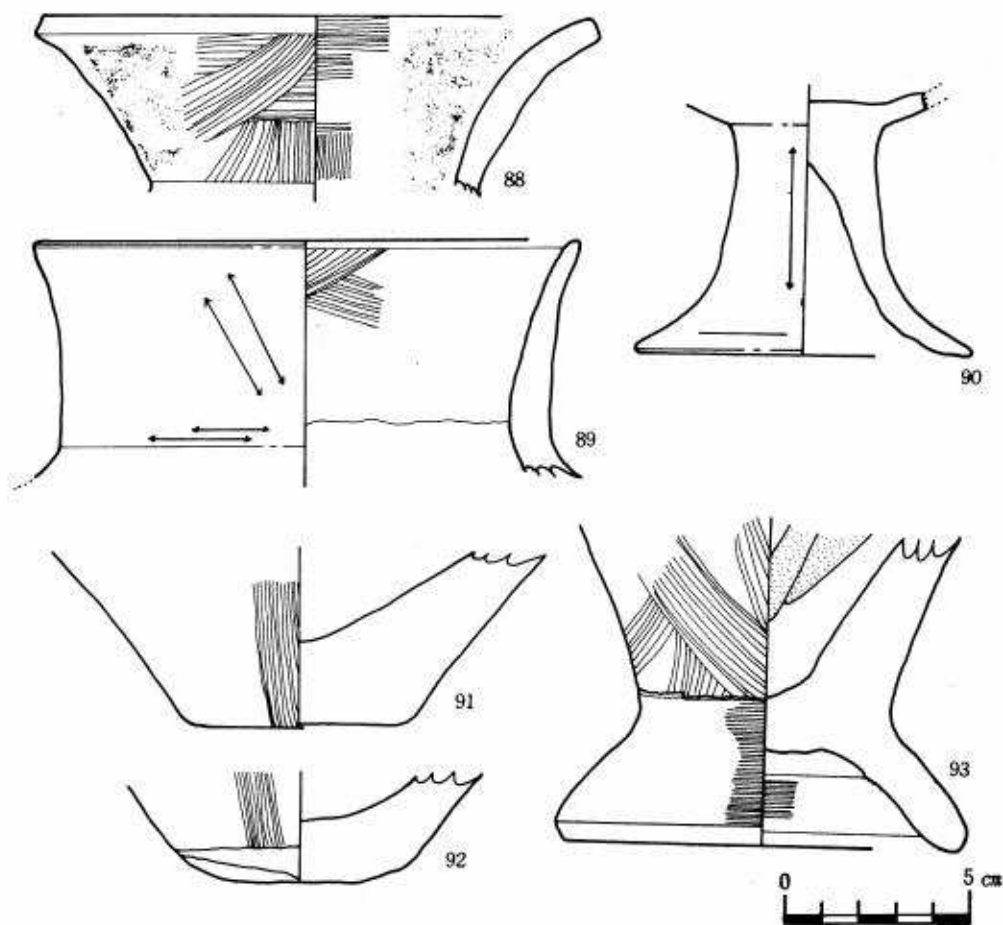
高隈山系の一つである御岳への登山道の入口がある瀬戸山神社周辺の畑地が、広範囲な遺物散布地となっている。この一帯は、小規模の扇状地的な地形が見られ、1~2m程の深さには多くの円礫等が見られる。散布している遺物は、古墳時代と縄文時代後期の遺物で、特に縄文時代後期の遺物は、イモ穴等の深く掘り下げた部分でしたか採集できない。古墳時代の遺物は、少破片が一般的である。76は、黒曜石を用いた削器(スクレイパー)で、縄文時代後期の遺物と一緒に出土している。礫面の残るやや厚手の縦長剥片の両側を刃部としている。刃部加工は、主として裏面より表面方向への剥離で行ない数ヶ所ではその逆も見られる。素材となった黒曜石は、透明度のない漆黒色で全く光を通さない。

(7) 小浜遺跡 (第15図77~87, 図版8)

鹿屋市浜田町小浜、これまで知られていた竹之崎遺跡もこの小浜遺跡に包括される。大根占町と垂水市を結ぶ国道269号線を足元に見おろす高台にあり、錦江湾につき出した台地上に立地



第15図 小浜遺跡出土の成川式土器



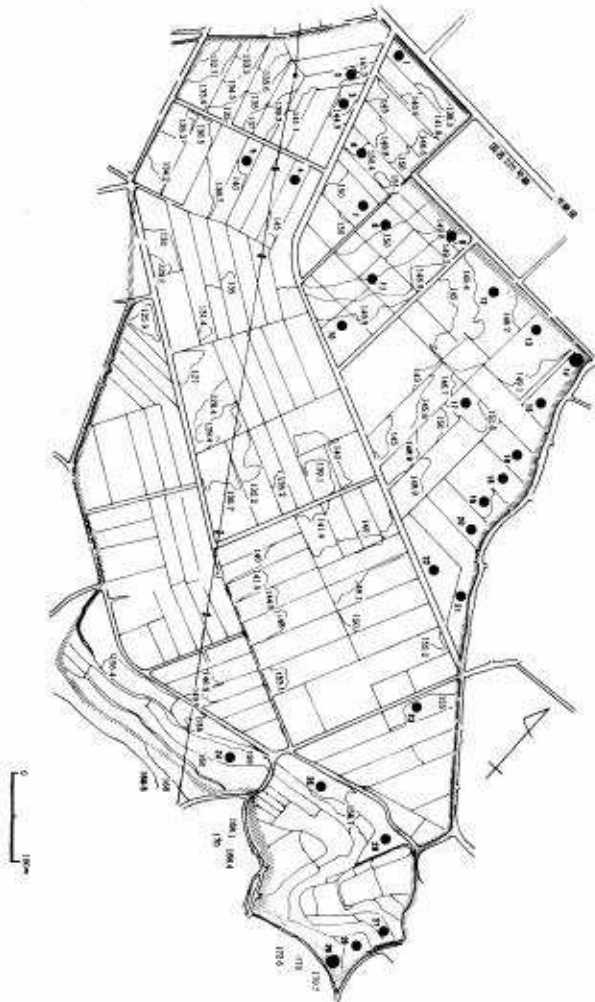
第16図 平原遺跡出土遺物

して、この国道269号線添には、このような台地が連なっておりそれぞれに遺物が残っている。総面積が20ha程の畑地全域に大量の遺物が散布している。本格的な畑地整備事業は行われていないが、個人による小規模な開地・地下げ等の工事が行なわれ、そのつと多くの遺物が掘りおこされ、包含層の露出している場所もある。その出土遺物のほとんどを古墳時代の遺物が占めている。

(8) 平原遺跡 (第16図88~93, 図版8)

小浜遺跡と谷をへだてた丘陵で、40ha程の地域に遺物の散布がみられる。条件の良い所では壁面に遺物の挟まれている状況を観察できる。採集できる遺物も小浜遺跡とほぼ類似している。胎土は、砂粒の多いものと粒子の細かい二つのタイプが見られる。器面の調整は、ヘラケズリ、ヘラナデ、刷毛ナデ、指頭によるもの等が見られる。86は細かい粘土帯が巡らされ刻みがつけられる。87は幅の広い粘土帯に斜めの沈線文がつけられる。これらは笹貫式と呼ばれるものに近いと考えている。

第5節 国立鹿屋体育大学の確認調査

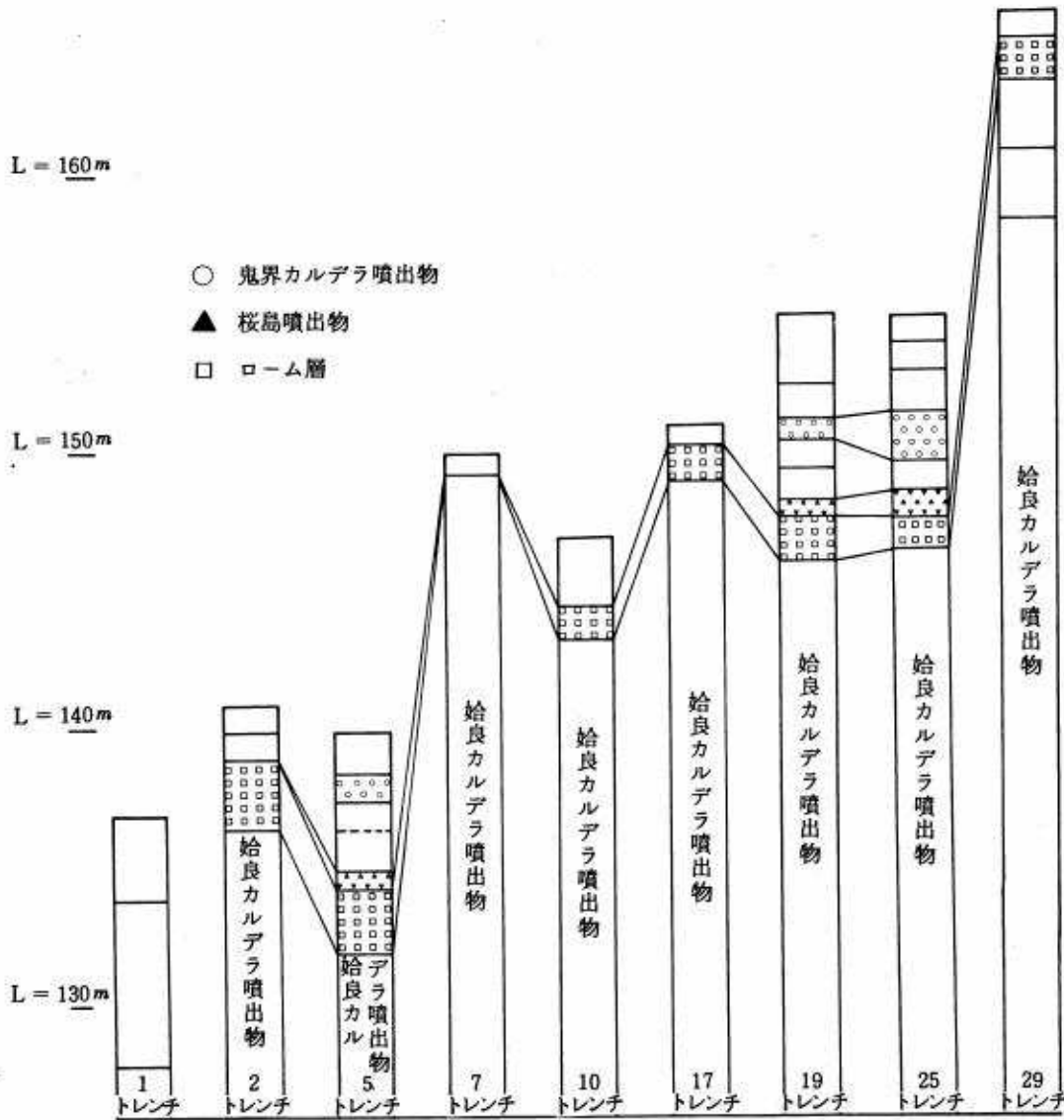


第17図 国立鹿屋体育大学敷地平面図・
及びトレンチ配置図

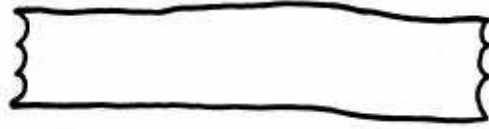
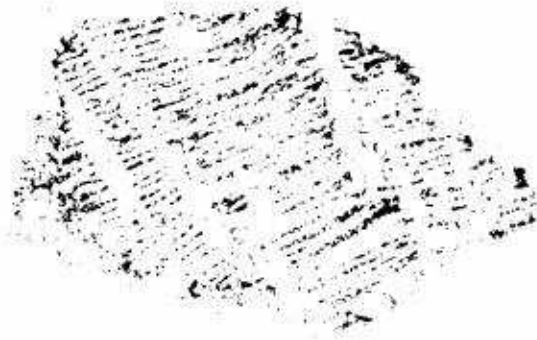
選んで設置した。1号トレンチでは、2m近い盛土がなされ旧地表面は-2mの深さにある。2号トレンチでは、20cmの盛土があり、40cmの深さには通称チョコ層と呼ばれる層が出てくる。7号トレンチでは、シラス層まで削られ15cmの盛土の下はシラスの層であった。19号、25号のトレンチは、残りがよく、70cm程の位置にアカホヤ層が残されている。15号から21号のトレンチの設定が接近しているのは、16号、18号と道路を隔てた白水運動公園の傾斜地の畑地に古墳時代の土器片が散布しており、その関連で調査を実施したが、明確な文化層をとらえることができなかった。24号から29号までのトレンチを設営した地域は、職員住宅等の関連施設の建設予定地である。この一帯は、北西向きの小さな舌状の台地を調査の対象とした。しかし、遺物は、出土していない。

国立鹿屋体育大学の新設に伴ない、同敷地の埋蔵文化財の有無を確認するための発掘調査を実施することとなり鹿屋市企画開発室と協議を行ない昭和56年12月21日から12月25日までの5日間、確認調査を行なった。対象となる敷地は、鹿屋市と垂水市を結ぶ国道220号線に添った古里町と白水町の間部の台地で、鹿屋市白水町の36haにおよぶ広大な面積をもつ畑地である。この畑地一帯は、昭和47年度までに県営の畑地かんがい事業が実施され、整備が進み、階段状の畑地がつくられている。旧地形を復元すると小高い丘陵地で、敷地内の中央部が最も高くなっていたと思われる。したがって中央部の敷地が最も激しくシラス面まで切り下げられて整地がなされていた。

調査は、3×3m、4×4mのトレンチ掘りとし、29ヶ所を発掘した。トレンチの設定場所は、任意に行なったが特に、畑地整備事業による影響を考慮し、なるべく旧地形に近い畑地を



第18図 国立鹿屋体育大学試験掘調査土層の柱状図



A

第19図 国立鹿屋体育大学敷地内表探遺物

第6節 大根占町、根占町、佐多町の遺跡及び遺物

大隅分布調査期間中に、調査対象外の市町村に点在する遺跡を調査・確認する機会があり、大根占・根占・佐多の三町に所在する遺跡について紹介する。

(I) 城元B遺跡 (第19図94~99, 図版5・遺跡番号1)

今回の大隅分布調査の際中に連絡があり確認した遺跡である。城元にあり標高約40mの台地縁辺部畑地に所在する。西側は急な絶壁となり下面に、大根占町の水田地帯が広がり、綿江湾を望む、広大な広がりをもつ遺跡である。遺物は、畑地一面に散布するが、一部ではすでに農道と畑地の整備が進み、畦断面等に遺物の包含を確認できる。遺物は、コラ層と呼ばれる黒色火山灰層に弥生時代中期の文化層、下層の淡黄褐色土層に縄文時代晩期の文化層がある。94~98は、縄文時代晩期の土器片である。94、95は組織痕土器片の一部で、内面は貝殻腹縁による条痕を付す。色調は、赤黄褐色で胎土に雲母、石英等の砂粒を含み、焼成は良好である。96は剥落が著しく、細部については不明である。表面に条痕を付す。97は、体部がゆるやかに立ち上がり、口縁部付近で逆「く」字状に急に内湾し、口唇部を形成するのであろうが少片のため決定的ではない。内面を横ナデ、外面は縦位にナデを行いその後、口唇部付近と口縁部直下に横ナデ痕が施してある。胎土に雲母、石英等の砂粒を含み、焼成も良好である。98は、底部に近い場所である。97と共に表面にススの付着が認められる。99は、弥生時代中期中葉に位置すると考えられる甕形土器である。口縁部は、逆L字状を呈する。胴部に4条の三角凸帯が確認されるが、細部については少片のため不明である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。本田道輝氏(鹿大助手)より通報を受けて、確認した遺跡である。

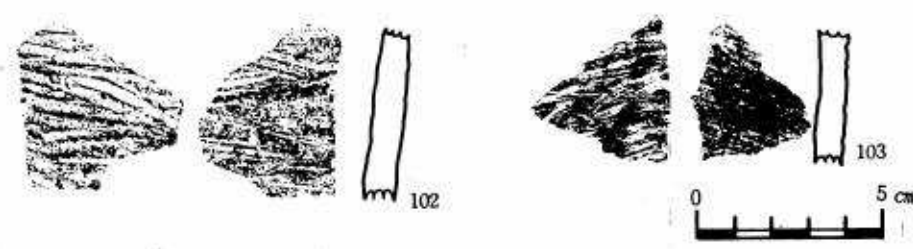
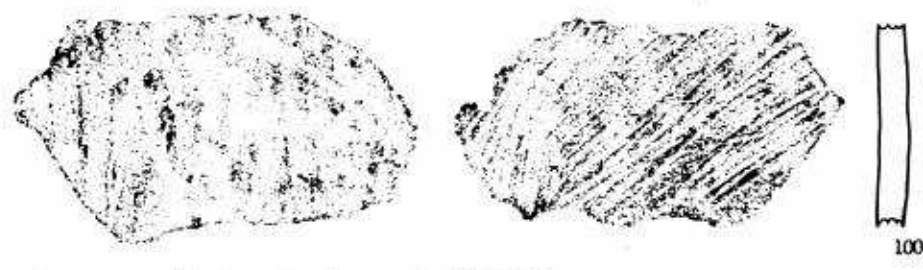
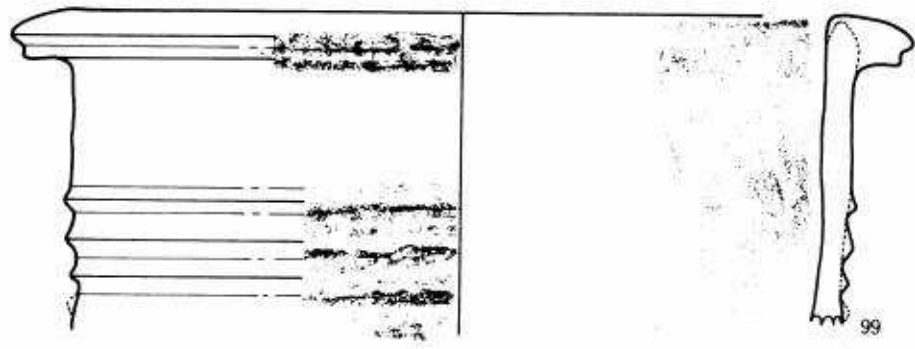
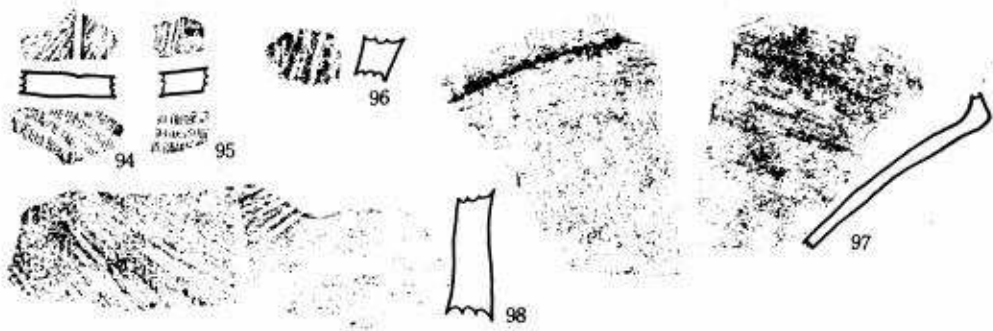
(II) 富田城(南谷城) (第19図100, 図版5・遺跡番号2)

富田城は、根占町北川城内にあり、禰寝氏の本城である。根占町を代表する遺跡の1つである。山城内には、縄文・古墳時代の遺跡が確認されていた。現在は、シラス取りのため本丸を残すのみで、中世山城の面影もない。100は、本丸近くで採集したもので、縄文時代後期の土器片であると思われる。

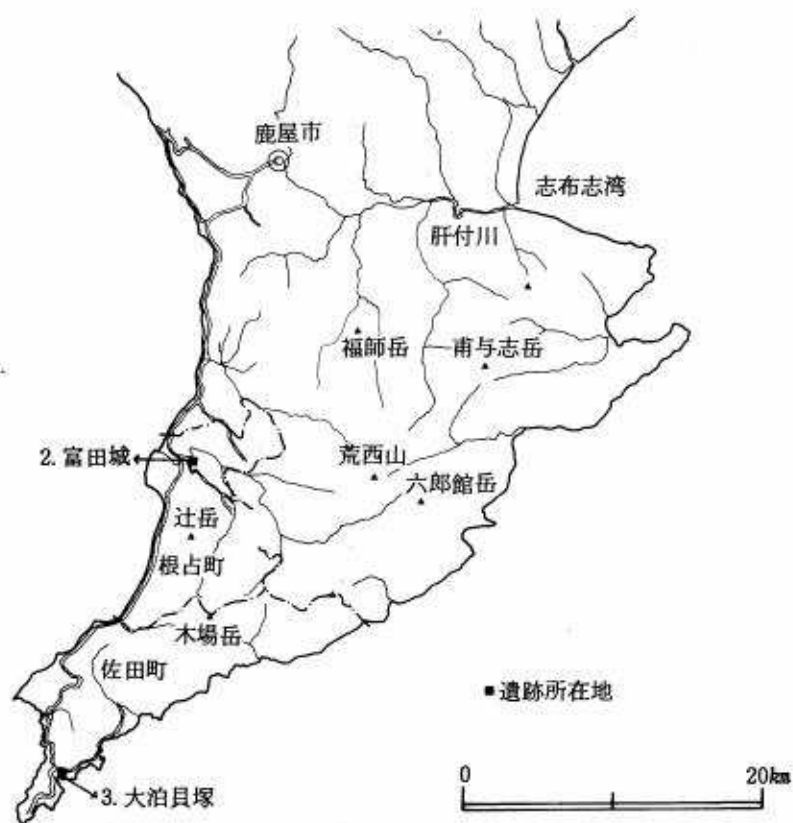
(III) 大泊貝塚B (第19図101~103, 図版5・遺跡番号3)

佐多町大泊にあり、文化庁発行の「全国遺跡地図-鹿児島県-」25-2の地点より北側の大泊集落内砂丘地に位置し、県道を中心に南側は墓地、北側は宅地造成が進み滅失が懸念される。大泊貝塚は、昭和28年、国分直一氏によって調査され、縄文時代後期の貝塚として報告されている。101~103は遺跡内で採集したもので、他に獣骨の散布も確認された。101は、口縁部断面が三角形を呈し、口唇部直下に2条の平行線を施し、その中に貝殻腹縁部を用い、縦位に圧痕文を付す。熊毛郡上屋久町の一湊山遺跡の7類土器に類するものと思われる。

102・103は、胴部片で表裏に条痕を残す。101~103は、胎土に石英等の砂粒を含み、焼成も良好である。



第20図 94~99 城元遺跡 100 富田城 101~103 大泊貝塚



第21図 遺跡所在地図

参考文献

1. 鶴田静磨 「輝北町郷土史」 鹿児島県曾於郡輝北町役場 1966年
2. 小大塚平男編 「内之浦町史」 鹿児島県肝属郡内之浦町教育委員会 1966年
3. 立神次郎・中村耕治 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿児島県埋蔵文化財調査発掘報告書(6) 鹿児島県教育委員会 1977年
4. 立神次郎・中村耕治 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(9) 鹿児島県教育委員会 1978年
5. 立神次郎・中村耕治 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(13) 鹿児島県教育委員会 1980年
6. 立神次郎 「大隅地区文化財分布調査事業報告」 鹿児島県教育委員会 1981年
7. 国分直一 「鹿児島県肝属郡佐多町大泊遺跡」 日本考古学年報6 日本考古学協会編纂 1963年

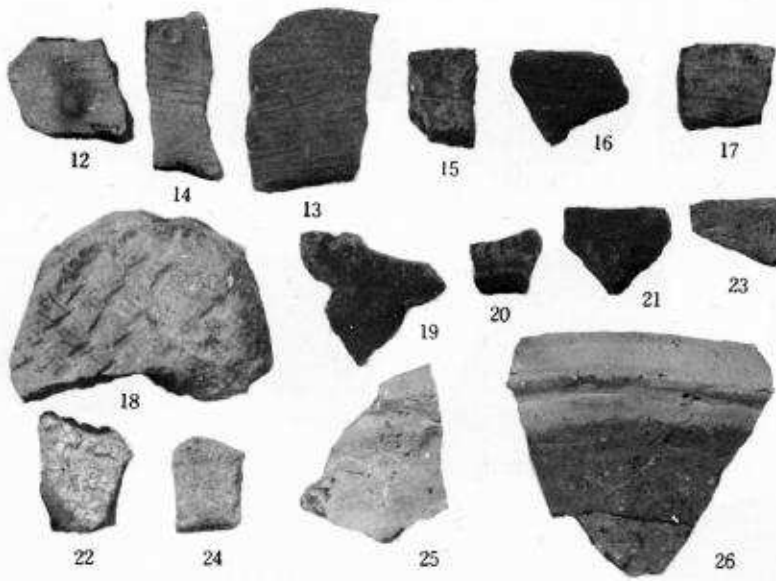
8. 鹿児島県教育委員会 『鹿児島県遺跡地図』 1973年
9. 文化庁 『全国遺跡地図・鹿児島県』 1975年
10. 隈昭志・桑原憲彰 「浜の館—阿蘇大宮司居館跡—」 熊本県文化財調査報告書21
集 熊本県教育委員会 1977年
11. 池畑耕一 「成川式土器の細分編年試案」 鹿児島考古14号 鹿児島県考古学会
1980年
12. 佐藤伸二 「矢護川日向遺跡調査報告」 日向遺跡調査団 1980年
13. 出口浩・繁昌正幸 「一湊山遺跡」 上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書 上屋久町
教育委員会 1981年
14. 多々良友博 「成川式土器の検討」 鹿児島考古15号 鹿児島県考古学会
1981年
15. 河口貞徳 「新南九州弥生式土器集成」 鹿児島考古15号 鹿児島県考古
学会 1981年
16. 鹿児島県肝属郡田代町教育委員会 『田代町の文化財』 1981年
17. 長野真一・井之上秀文 「宮ノ迫遺跡」 末吉町埋蔵文化財調査報告書2 鹿児島
県曾於郡末吉町教育委員会 1981年



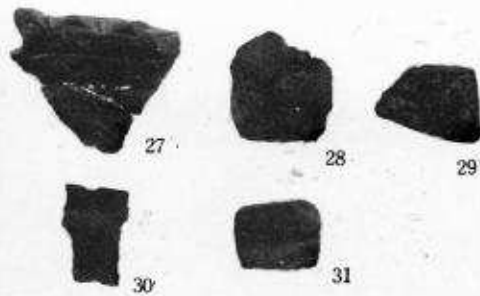
引地遺跡(2)
徳光ヶ丘遺跡(3~11)



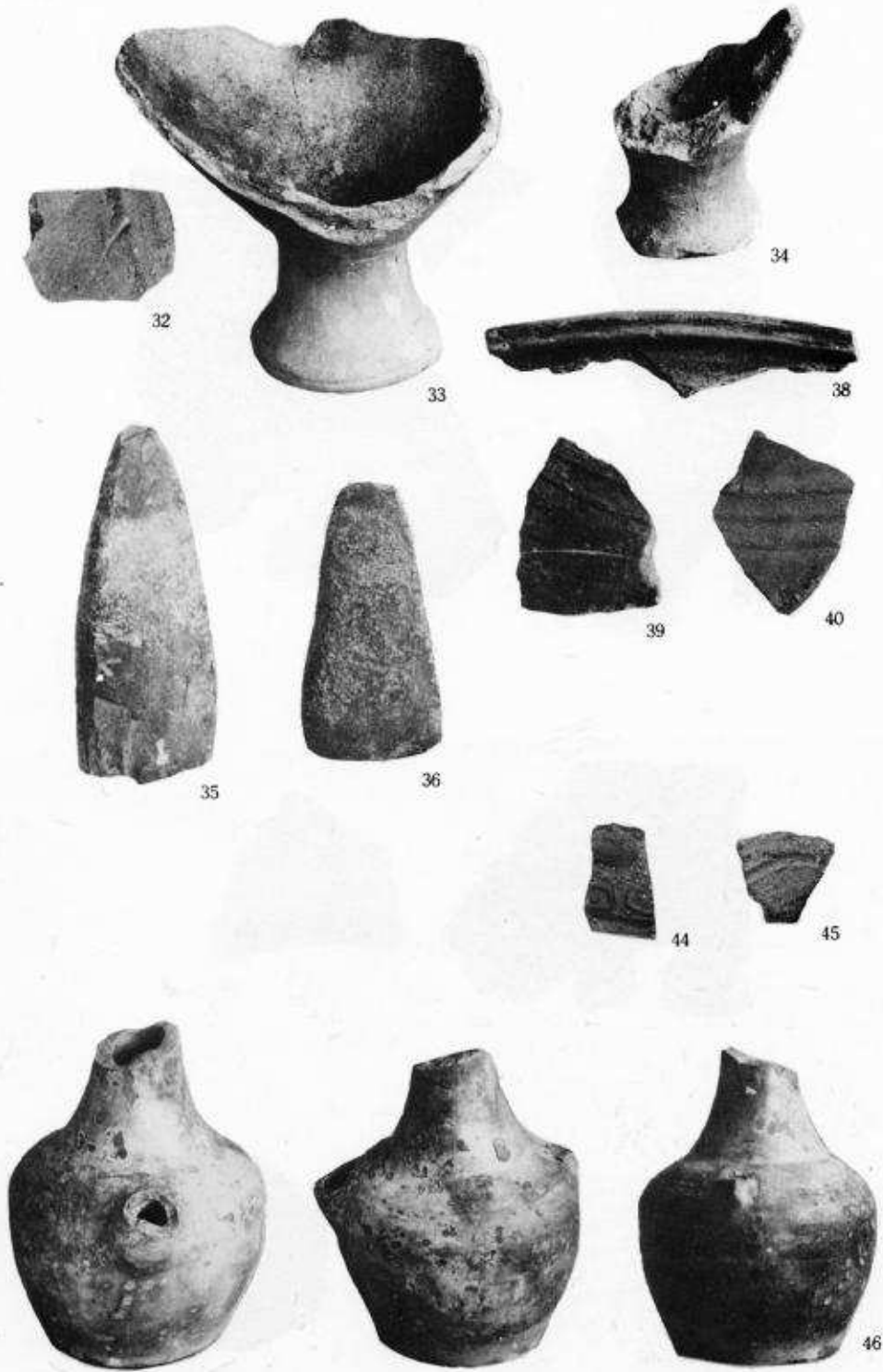
徳ヶ丘遺跡 近景(南方向を望む)



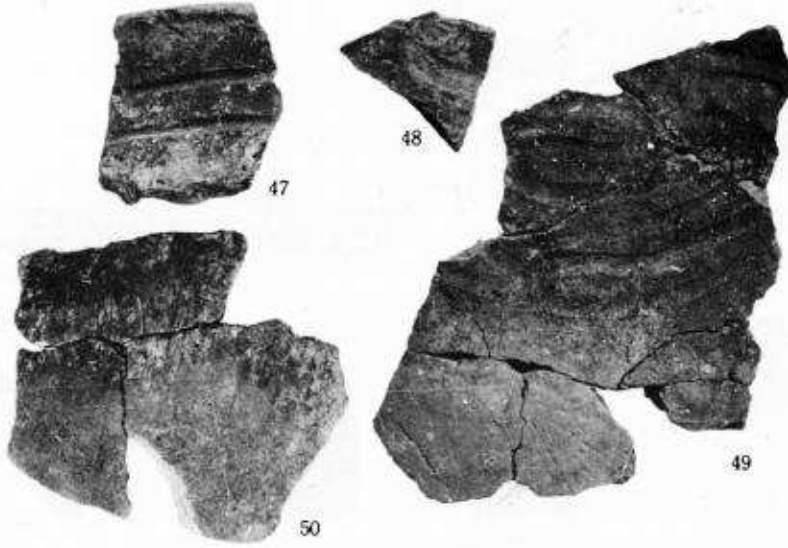
隠畑 (12 ~ 14) ・久木野々 (15 ~ 18) ・ハシバダン (19 ・ 26)
青木段 (25 ・ 26)



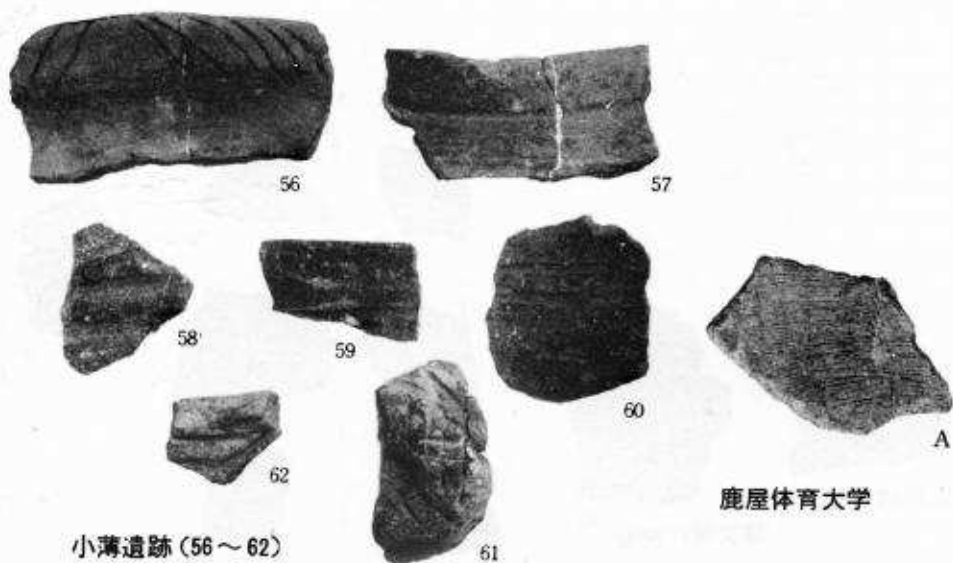
観音ヶ尾遺跡 (27 ~ 31) ・出土状況



大根田遺跡 (32 ~ 40) ・辺塚遺跡 (44 ・ 45) ・本池遺跡 (46)



柴立遺跡



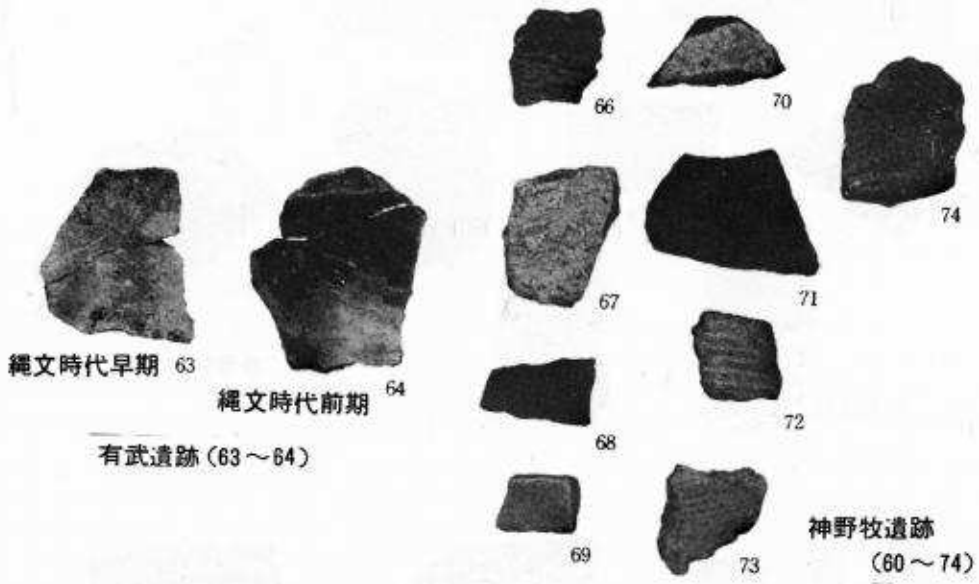
小薄遺跡 (56~62)



城元 B 遺跡 (94~99)



大泊貝塚 B 地点 (101~103)



有武遺跡土層断面



神野牧遺跡

75



76

上抜川遺跡

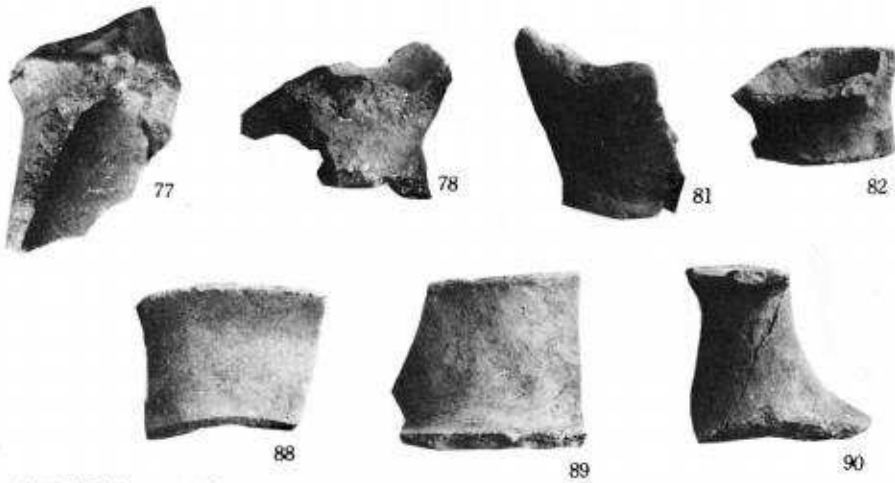


大浦遺跡

65



大浦遺跡群内地下式横穴



小浜遺跡 (77~82)
平原遺跡 (88~90)



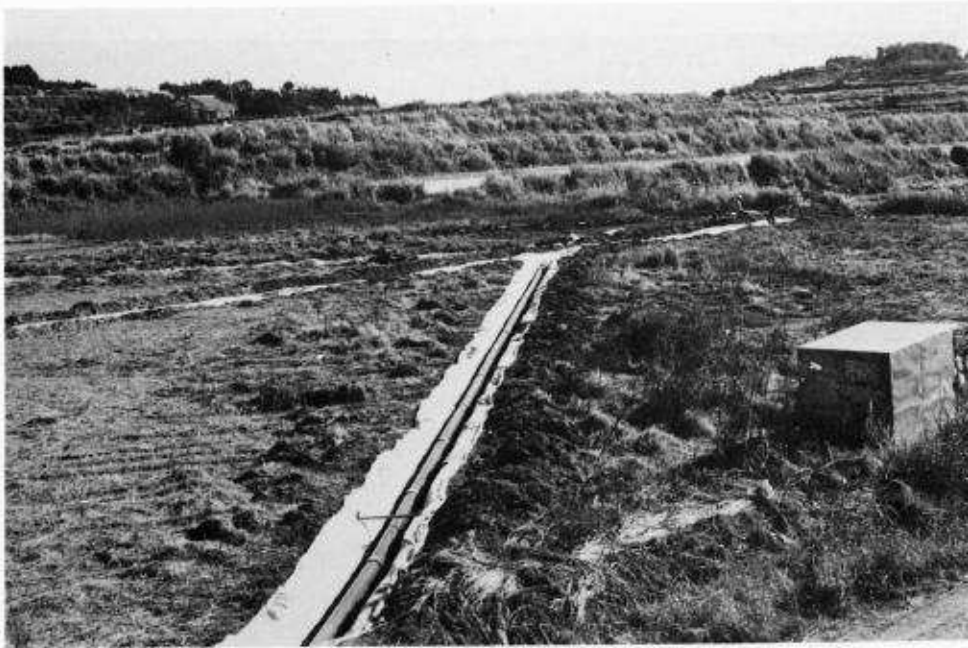
麓遺跡 (1)



引地遺跡出土状況



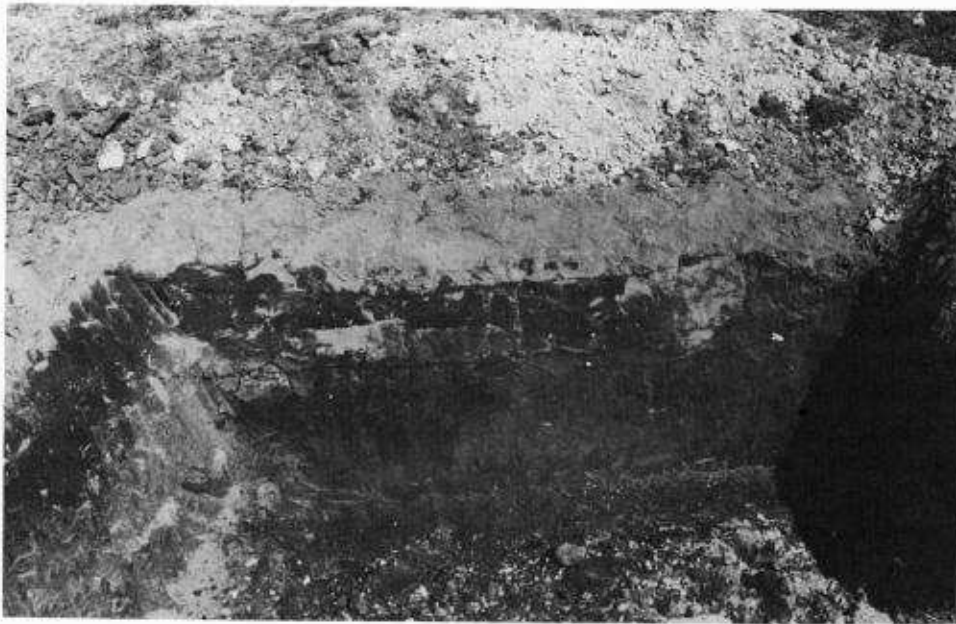
国立鹿屋体育大学遠景（北東方向を望む）



国立鹿屋体育大学近景（東方向を望む）



国立鹿屋体育大学試掘トレンチ（25号トレンチ）



国立鹿屋体育大学試掘トレンチ（2号トレンチ）

あ と が き

昭和56年11月30日より3ヶ月間、大隅半島のあちこちを歩き回って来た。その間、多くの遺跡と接し、その度に、種々の感懐があった。

輝北町は、火山灰が厚く堆積し、遺跡の発見は困難な地域である。町内には、多くの縄文時代後期の遺跡が点在しているが、これらの遺跡は、開墾や畑地整備事業等の工事が行われ、そののち確認できたものである。昨年と今回の2回の調査で、町内は、かなり丹念に調査した。

田代町では、雄川（花瀬川）流域を中心に調査を実施した。今回は、新たに遺跡を探すことはできなかったが、これまで知られている遺跡の再確認調査を実施してきた。大根田遺跡は、当初の予想をはるかに上回る広範な遺跡であるが、現在の集落と重複しており、少しずつ、くずされてきつつある。勝尾城跡は、ほとんど古い姿をとどめている。

内之浦町の調査は、主に内之浦湾に面した北方・南方周辺を中心に行い、宮原、川口、大浦等調査できなかった所もある。杵ノ木前田遺跡も、田代町の大根田遺跡と同様に集落内に残されており、何らかの保護対策を必要とすると思われる。

鹿屋市の調査は、肝属川と高須川の流域を対象としてきたが、その結果、全域にわたって遺跡が分布していることがわかった。

これまでの6年間、大隅地域の市町村を対象として分布調査を実施し発見した遺跡の数もかなりになっているので、これらの調査結果を活かすよう周知の徹底を図るところがのぞまれる。

大隅地区埋蔵文化財分布調査概報

発行日 昭和57年3月
発行 鹿児島県教育委員会
〒892 鹿児島市山下町14番50号
印刷 こだま印刷有限会社
住所 〒892 鹿児島市下竜尾町26-1